

音 谷 窯 跡

— (仮称) 小野山田地区開発事業に伴う埋蔵文化財確認調査報告 —

1997. 12

兵 庫 県 教 育 委 員 会

音 谷 窯 跡

— (仮称) 小野山田地区開発事業に伴う埋蔵文化財確認調査報告 —



音谷窯跡 全景

例　　言

1. 本書は、兵庫県教育委員会が実施した小野市山田町・天神町所在の（仮称）小野山田地区開発事業に伴う埋蔵文化財確認調査報告書である。
2. 調査は、平成7・8年度に兵庫県教育委員会が調査主体となり、国庫補助事業として実施した。
3. （仮称）小野山田地区開発事業は復興住宅を含む開発であることから、復興調査の一環として復興調査班が担当した。平成7年度は立神次郎・佐藤公保・矢口裕之・目次謙一・沖 憲明・平田博幸・渡辺 畏が、平成8年度は今村道雄・植松邦浩・川口洋平・渡辺 畏が担当した。
4. 確認調査の結果、すでに消滅した古墳や遺構が確認されなかった遺跡・散布地が大半であったことから、明瞭な遺構が検出された音谷窯跡を書名として使用した。
5. 本書で示す標高値は、兵庫県住宅供給公社設定のB. M. を使用した。方位は磁北である。
6. 整理作業は、平成7・8年度は小野山田地区現場事務所で実施し、平成9年度は兵庫県埋蔵文化財調査事務所で実施した。
7. 執筆分担は本文目次のとおりである。
8. 本報告にかかる遺物・スライドなどの資料は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5）ならびに兵庫県教育委員会魚住分館（明石市魚住町清水立合池の下630-1）に保管している。



小野市の位置

図37	大道端遺跡 トレンチ配置図（1：2000）	42
図38	大道端遺跡 第15トレンチ 崩・古墳状隆起平面図	44
図39	大道端遺跡 第1大道端遺跡 第15-3・4トレンチ 崩平面図	45
図40	大道端遺跡 崩検出状況	46
図41	大道端遺跡 古墳状隆起	46
図42	山田古墳 トレンチ全景	47
図43	音谷遺跡 トレンチ全景	47
図44	調査地遠景	48

図版目次

巻頭図版	音谷窯跡 全景	
図版1	小野市山田町周辺空中写真（国土地理院撮影）	
図版2（上）	音谷窯跡 遠景	
（下）	音谷窯跡 窯体全景	
図版3（上）	音谷窯跡 窯体全景	
（下）	音谷窯跡 窯体 焚口部	
図版4（上）	音谷窯跡 窯体 遺物出土状態	
（下）	音谷窯跡 窯体 遺物出土状態	
図版5（上）	音谷窯跡 焚口部 土層堆積状況	
（下）	音谷窯跡 灰原 土層堆積状況	
図版6（左上）	迎田上遺跡 第23トレンチ	
（右上）	迎田上遺跡 第32トレンチ	
（下）	迎田上遺跡 燃土坑	
図版7（上）	観音谷遺跡 第22-2トレンチ全景	
（下）	観音谷遺跡 第22-2トレンチ全景	
図版8（上）	観音谷遺跡 磁石建物跡全景	
（下）	観音谷遺跡 石組	
図版9（上）	大道端遺跡 第15トレンチ	
（下）	大道端遺跡 第15トレンチ	
図版10（上）	大道端遺跡 第15トレンチ 古墳状隆起	
（下）	大道端遺跡 第15トレンチ	
図版11	音谷窯跡 出土遺物	
図版12	音谷窯跡 出土遺物	
図版13（上）	音谷窯跡 出土遺物	
（中）	迎田上遺跡 出土遺物	
（下）	観音谷遺跡 出土遺物	

挿 図 目 次

図1	開発予定地の位置	1
図2	調査風景	2
図3	調査風景	3
図4	調査風景	4
図5	小野市山田町接峰面図	6
図6	小野市山田町地形面区分図	7
図7	YD1面を構成する赤色土化を受けた礫層	8
図8	YD2面を構成する礫層	9
図9	YD3面の地形	9
図10	YD4面の地形	10
図11	小野市山田町地形ダイアグラム	11
図12	各地形面に分布する被覆層の対比	13
図13	調査地遠景	15
図14	王塚古墳	16
図15	音谷窯跡と周辺の遺跡	17
図16	焼山古墳群	18
図17	音谷窯跡調査風景	19
図18	音谷窯跡 地形測量図	20
図19	音谷窯跡 窯体実測図	21
図20	音谷窯跡 窯体土層断面図	22
図21	音谷窯跡 窯体遺物出土状態図	23
図22	音谷窯跡 灰原土層断面図	24
図23	音谷窯跡 出土遺物実測図(1) (窯体)	25
図24	音谷窯跡 出土遺物実測図(2) (灰原)	26
図25	迎田上遺跡 第23トレンチ全景	32
図26	迎田上遺跡 第32トレンチ全景	32
図27	迎田上遺跡 トレンチ配置図 (1:4000)	33
図28	迎田上遺跡 第23トレンチ 焼土坑	34
図29	迎田上遺跡 第23トレンチ 焼土坑実測図	35
図30	迎田上遺跡 第32-5トレンチ 全景	36
図31	迎田上遺跡 出土遺物実測図	37
図32	般音谷遺跡 トレンチ配置図 (1:4000)	38
図33	般音谷遺跡 第22-2トレンチ 平面図	39
図34	般音谷遺跡 第21トレンチ 石組実測図	40
図35	般音谷遺跡 第22-2トレンチ 全景	40
図36	般音谷遺跡 出土遺物実測図	41

本文目次

例言

I.はじめに	渡辺 昇	
1. 調査に至る経緯		1
2. 平成7年度の調査経過		2
3. 平成8年度の調査経過		3
4. 整理作業の調査経過		4
II.位置と環境		
1. 地理的環境	矢口裕之	5
2. 歴史的環境	渡辺	16
III.音谷窯跡の調査	渡辺	
1. はじめに		19
2. 外形		20
3. 窯体		22
4. 灰原		25
5. 出土遺物		27
6. おわりに		27
IV.確認調査結果		
1. 迎田上遺跡	沖 澄明・今村道雄・川口洋平	32
2. 観音谷遺跡	矢口	38
3. 大道端遺跡	矢口・渡辺	42
4. その他の遺跡	目次謙一・川口	47
V. おわりに	渡辺	49

表目次

表1	平成7年度 調査一覧	2
表2	平成8年度 調査一覧	3
表3	音谷窯跡 出土須恵器分類表	27
表4	音谷窯跡 遺物観察表	28~31

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

(仮称) 小野山田地区開発は、小野市街地から東方約2kmの丘陵地帯を対象とした開発事業である。復興住宅をはじめ、産業施設・福祉施設などが計画されている。総面積約138haであるが、大半は山林である。計画地周辺の丘陵裾部を自動車道は迂回しているが、江戸時代の道は用地内を東西に通っていた。その大道と呼ばれていた道は小野中心地から東条方面へ向かう主要道路であったため、大道端の字が残っている。山間の数個所に墓地が見られ、高僧が修行したという行場の伝承も残されている。

当該地域は昭和初期の山火事に遭っていることから通称焼山と呼ばれている地域である。県指定になっている国道175号線バイパス西側の焼山古墳群の存在する丘陵と同じ火事で被災したもので、広く地元では焼山と呼称されている。

焼山古墳群と同種の古墳状隆起や須恵器窯跡が開発計画用地内に存在することから、開発に先立ち確認調査を実施することになった。開発計画に則して、第1期分の誘致施設部分から確認調査を手掛け、順次他地区へと広げていった。

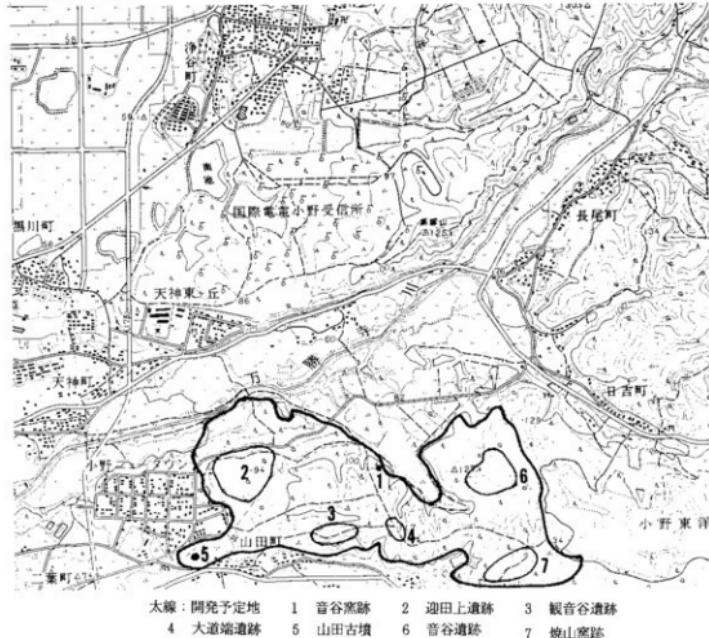


図1 開発予定地の位置

2. 平成7年度の調査経過

周知の遺跡地図や現地確認によると事業地内には、7箇所の遺跡が存在している。事業計画の中に住宅地が含まれており復興事業の一環として、兵庫県教育委員会では復興調査班が担当することになった。兵庫県は阪神・淡路大震災の復興のために全国から人的支援も受けている。兵庫県教育委員会でも復興事業の調査に、全国から埋蔵文化財担当者の派遣を受けていた。平成8年度下半期には35名で、復興調査班として調査を担当して戴いていた。小野山田地区についても同様に各府県からの派遣の職員を中心に戸籍の担当者とともに調査を実施した。

開発計画が進んでいく中で、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所と兵庫県住宅供給公社小野新都市開発事業所との間で協議が継続してきた。その結果、第1工区である南東部分の確認調査から実施することになり、10月31日から調査を開始した。該当地域の伐採作業・片付けを行ったのち、幅2mのトレーニングを設定した。バックホーを使用して掘り下げるのち、断面・平面を精査して、遺構の有無を確認する方法を基準とした。地形などを考慮してトレーニングの長さや深さを決定した。機械が入りにくい地点は、人力のみで掘り下げを行い確認した。最初の焼山窯跡群の調査は、10月31日から11月30日まで行った。実働は17日間である。

引き続き12月8日に小野新都市開発事業所で今後の調査地点の打合せを行い、翌週(11日)から調査を継続することとなった。開発計画地の南西部の調査を行うこととし、山田古墳の確認調査から着手した。その後南側中央部分(大道端遺跡・観音谷遺跡)から北側(音谷窯跡・迎田上遺跡)へと既買収

表1 平成7年度 調査一覧

遺跡名	担当者	調査面積	調査期間	調査番号
焼山窯跡群	立神次郎・目次謙一	1293m ²	7.11.3.~11.30.	950261
山田古墳	渡辺昇・平田博幸	38m ²	7.12.11.~12.15.	950312
大道端遺跡	矢口裕之・渡辺昇	440m ²	7.12.18.~12.29.	950313
観音谷遺跡	矢口裕之・佐藤公保・渡辺昇	348m ²	8.1.5.~1.31.	950315
音谷窯跡	渡辺昇・矢口裕之・沖憲明	425m ²	8.1.29.~3.26.	950314
迎田上遺跡	矢口裕之・沖憲明・渡辺昇	586m ²	8.2.19.~3.8.	950339



図2 調査風景

地のみを続けて調査を行うことになった。3月28日まで実働56日間を費やした。確認調査であることから、埋め戻し作業も行った。音谷窯跡については窯体も一部検出したので、土葬役などで保護措置を講じて埋め戻しを行っている。

調査担当者は表1のとおりである。また、大規模な確認調査のため、現地調査事務所を置き、整理作業も一部行った。

調査の組織

兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所

調査事務 山本三郎・水口富夫・平田博幸・山本 誠・飯尾彦人

調査担当 立神次郎（鹿児島県）・目次謙一（鳥取県）・矢口裕之（群馬県）

佐藤公保（愛知県）・沖 憲明（広島県）・渡辺 昇・平田博幸（兵庫県）

3. 平成8年度の調査経過

翌年も継続して確認調査を実施した。調査は昨年度未買収だった地点と2次確認調査が必要な地点を対象として実施し、ゴールデンウィーク明けから再開した。調査対象地の地目はほとんど雜木林で、下草も繁茂している荒れ地となっている。そのため昨年度同様、伐作業から実施した。今年度は2遺跡の調査を行った。迎田上遺跡と音谷遺跡で新たに調査可能となった地点である。また、迎田上遺跡は昨年度遺構・遺物は確認したが、遺跡の広がりや性格が不明であったことから第2次確認調査を実施した。昨年同様埋め戻し作業も行った。6月28日までの計22日間調査に費やした。

表2 平成8年度 調査一覧

遺跡名	担当者	調査面積	調査期間	調査番号
迎田上遺跡	今村道雄・川口洋平	920m ²	8. 5.13.~6.28.	960089
	植松邦浩・渡辺 昇			
音谷遺跡	今村道雄・川口洋平	116m ²	8. 6. 3.~6.13.	960090



図3 調査風景

調査の組織

・兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所

　調査事務　山本三郎・稻田　毅・種定淳介・平田博幸・谷山健一

　調査担当　今村道雄（大阪府）・植松邦浩（香川県）・川口洋平（長崎県）・渡辺　昇（兵庫県）

調査補助員

前田　陽子・牛谷　好伸・越智みや子・高谷　百世・黒田　智香・後藤　有里・多田　豊富

前田俊一郎・辻　裕明・難波　恒雄・谷勝　一文・藤原　正裕・松山　将也・永井　弘子

内藤寿美子・藤田　由美・佐藤　朋子・菊島　昌子・富永　浩子・林　美代子・藤井　光代

4. 整理作業の調査経過

2年度にわたる発掘調査の整理作業を行った。平成7・8年度は小野山田地区発掘調査現場事務所で整理作業を行ったが、平成9年度は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で実施した。平成7・8年度に水洗い・注記・接合復原・実測作業と出土遺物の写真撮影を主に行い、平成9年度に一部の遺物写真撮影からレイアウト・報告書の編集作業を行い、報告書刊行までの作業を実施した。

調査の組織

兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所

　調査事務　稲田　毅・種定淳介・平田博幸・谷山健一

　調査担当　渡辺　昇

調査協力者

西田　猛・中西　信・小川真理子・永井信弘・友久伸子・宮原みゆき

小野市教育委員会・山田地区自治会



図4 調査風景

II. 位置と環境

1. 地理的環境

(1) 自然環境の概要

小野市の東南に広がる丘陵や台地は、標高約150～50m前後のなだらかな山麓からなり、万勝寺川や山田川は谷間を刻みながら、清流を加古川にそそぎ込んでいる。なだらかな山々の広がりと谷間を流れる清流は、この地域の景観をつくる重要な要素の一つであり、この景色は西脇・三田・明石・加古川河口を頂点に、長方形に見立てられた地域に広がっている。その西縁部には加古川が流れ、広大な長方形の一辺は約40～20kmに及ぶ。このような景観をつくり出す地域ブロックは、縁辺を山地に囲まれており、それらは六甲山地や丹波山地の山塊からなる。

播磨東部の丘陵を概観すると六甲山地を南限に三田市から神戸市北区淡河町にかけて新第三系の神戸層群から構成される丘陵地が広がり、西脇市から小野市、三木市を経て明石市に至る加古川左岸には大阪層群や段丘堆積物によってつくられた丘陵や台地が広がっている。これらの丘陵や台地は、東播・北播丘陵台地と呼ばれている。

特に、小野市から淡河を経て三田に至る地域は、大きな断層に境され、山地に囲まれた盆地構造を呈する。これは第四紀の山地の隆起運動によってまわりの山々から取り残された地塊が、一見陥没しているように見られることから、一種の地溝と考えられるだろう。この構造盆地は、攝播陥凹地（田中, 1994）と呼ばれている。

加古川沿いの丘陵や台地には、谷出口を塞ぎ、谷頭を貯水目的で利用した「ため池」が目立ち、その分布は加古川の段丘面上に顕著である。この地域は、年間を通しての降水量が約1500～1200mm程度であり、北海道を除く本州のそれが3000～2000mm級の降水量であることを考えると、寡雨地域であることがわかる。台地上の水資源の確保は、長い間の人々の知恵から導き出され、その要因は瀬戸内式気候と呼ばれる温暖な気象環境がその理由となっていることが理解される。

丘陵に見られる土壤は、未熟土系土壤や赤色系土壤であるが、一部に褐色～黄色土壤がみられる。丘陵頂部に見られる赤色土壤は、厚さ数mの赤色風化殻を有し、上部には横に縞状を呈する構造が、下部には霜降り肉を思わせる赤と白色部の構造が顕著で、トラ班土壤と呼ばれている。これらは、かつての温暖な気候下で形成された化石土壤であるとされ、小野市の東南に広がる丘陵の露頭断面などで観察することが出来る。

(2) 地形

小野市の東南に広がる丘陵や台地には、小野山田遺跡とその周辺の遺跡が分布している。遺跡が見られる地域は、万勝寺川と山田川に挟まれた幅1km、長さ4kmほどの丘陵および台地で、おおよそ西南西の方向に緩く傾く舌状の地形を呈している。

丘陵や台地の標高は、大開町の150m前後の平坦地形面を頂点にして、双葉町の住吉神社付近で標高40mに及ぶ。この地域の旧地形を概観するため、埋谷法により幅100mの谷を埋め、20m間隔の等高線で表した接峰面図を作成した（図5）。

図 5 小野市山田町地勢図

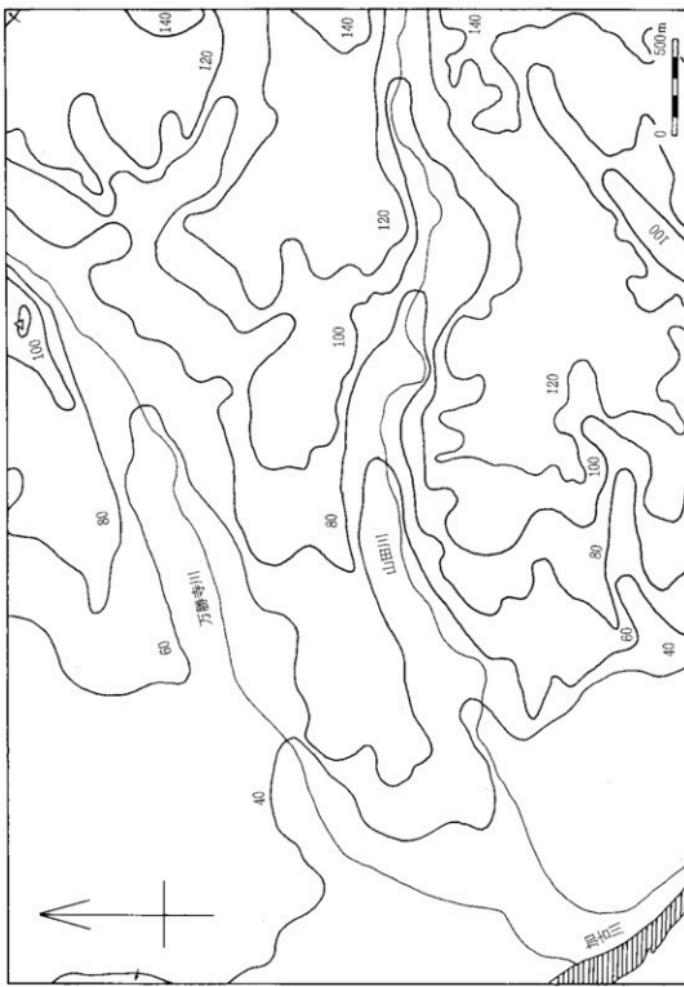
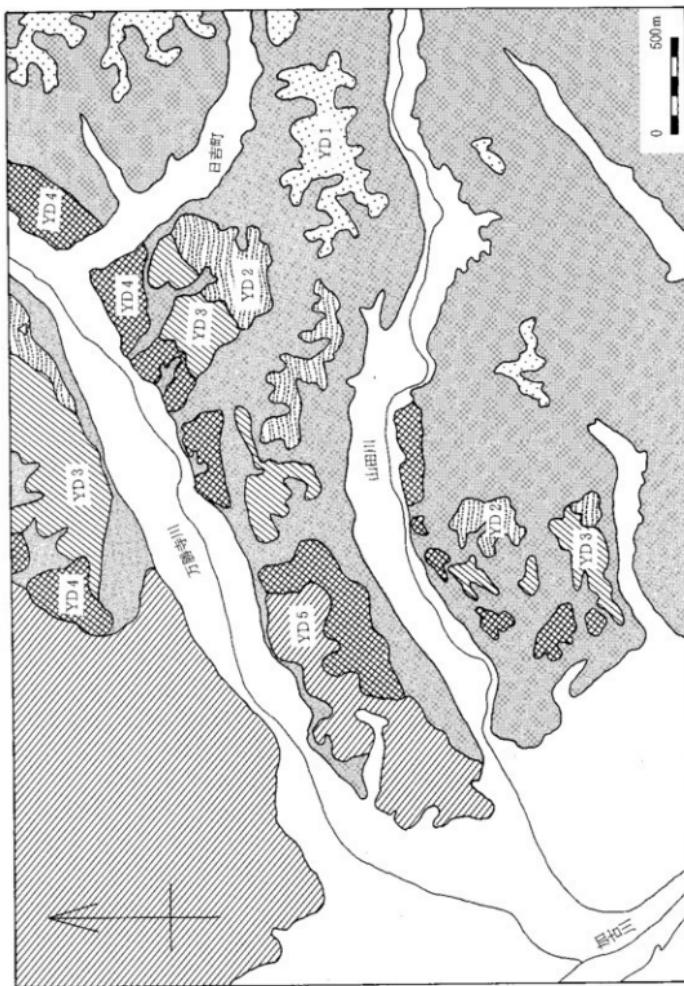


図 6 小野市山田町地形面区分図



接峰面図からは、万勝寺川と山田川を境界にした三つの地形ブロックが読みとれる。便宜上、万勝寺川北部をTk丘陵ブロック、遺跡の分布する万勝寺川と山田川に挟まれた地区をMY丘陵ブロック、山田川南部をIb丘陵ブロックと仮称する。

MY丘陵ブロックは、標高140~40mで西南西の方向に緩く傾く舌状地形を呈している。北東部は日吉集落を中心に標高120m面が広がっている。万勝寺川と山田川に挟まれた標高100~40m面は、河川の流下方向に沿って伸び、60m面がやや広い。

Ib丘陵ブロックは、MY丘陵ブロックに続く標高120m面が広がっている。標高120~40mは、周辺に比べ開析を受け、西南西の方向に傾く斜面地形を呈している。Tk丘陵ブロックは、標高125.1mの高塚山を頂点にしており、それに続く万勝寺川上游のピークも130m前後である。標高100~40m面は西南西の方向に最も傾斜した地形を呈している。

これらの観察からこの地形を概観してみよう。小野市の東南に広がる丘陵は、標高140~120mに平坦地形面が分布し、開析された丘陵頂部を構成する最高位面を形成している。標高120m以下の丘陵及び台地は、開析の差によって三つの地形ブロックに区分され、南部ほど旧地形の開析が著しい。小野山田遺跡とその周辺の遺跡が分布しているMYブロックは、南北の地形ブロックの中間の特徴を備えている。

各地形ブロックの南側は、河川の流路となり比較的急峻な斜面から成っている。またブロックの北側は北西方向に傾く緩斜面を構成する。このような地形の特徴は、傾動運動を受けた地盤に一般的に見られる特徴を備えている。

小野市の東南に広がる丘陵の地形は、どのような成り立ちで形成されたのであろうか。国土地理院の25000分の1地形図を利用して地形面区分を行い現地での観察にもとづいて地形面区分図を作成した(図6)。調査地域には、万勝寺川と山田川沿いに5面の段丘と丘陵、谷底平野を構成する沖積面が読み取れる。

調査地域の地形発達史に関する研究は、河名(1973)や那須・天白(1987)、田中(1994)らが行っている。今回の報告では、調査地域の丘陵形成の概観を目的にし、5面の段丘を高位の段丘面からYD1~YD5面と仮称し、その概要を報告する。今後、航空写真と現地調査を併用した場合、さらに細かく段丘面の区分が行える可能性がある。

(1) 高位段丘面

名称 : YD 1面

分布 : 標高130m付近に分布し、丘陵頂部の尾根付近に広がる平坦部で、北西方向に緩く傾斜する傾向がある。

特徴 : 本地域の最高位面を構成し、谷の開析作用によって平坦面の保存は悪い。丘陵頂部に残る平坦面の分布から、かつてかなり広い範囲に段丘面が存在していたことが推測され、開析により段丘崖は残存していない。段丘面を構成する礫層は赤色土壌化作用を被り、くされ疊化が著しい。

段丘の構成層 : 明美累層(市原ほか, 1958; 1960) ; 旧期明美疊層(那須・天白, 1987)。YD 1面を構成する疊層はきわめて断片的な部分で(薪原ほか,



図7 YD 1面を構成する赤色土化を受けた礫層

1995)、大開町付近の露頭から得られた観察から、最大層厚は20m以上と思われる。

対比：高位明美面（市原ほか,1958:1960）、万勝寺面（河名, 1973）、高位明美面群（那須・天白, 1987）に比定される。

名称：YD 2面

分布：標高110m付近に分布し、丘陵頂部を構成する北側尾根付近と中山田集落の北側、万勝寺川右岸の高塚山付近に広がる平坦面で、北西方向に傾斜する傾向がある。

特徴：YD 2面は本地域の高位段丘面を構成し中山田集落の北側の平坦面の保存は良く、大道端・觀音谷発掘区が立地している。YD 2面を構成する礫層の分布は断片的で、開析により段丘崖は残存していない。礫層上部は、赤色土化作用やくされ礫化作用を受けている。また小野クリーンセンター沿いに位置する焼山窯跡は、YD 2面が開析された谷の斜面に立地している。

段丘の構成層：明美累層（市原ほか,1958:1960）；新期明美礫層（那須・天白, 1987）。日吉町日吉社裏付近の露頭から得られた観察から、最大層厚は20m以上と思われる。

対比：高位明美面（市原ほか,1958:1960）、万勝寺面（河名, 1973）、高位明美面群（那須・天白, 1987）に比定される。



図8 YD 2面を構成する礫層

(2) 中位段丘面

名称：YD 3面

分布：標高100～90m付近に分布し、高塚山北西部やMY丘陵ブロックの北側緩斜面と小野ニュータウン東部、山田川左岸に断片的に広がる平坦面で、北西方向に緩く傾斜する傾向がある。

特徴：YD 3面は本地域の中位段丘面を構成し、開析により段丘崖の保存は悪いものの、小野ニュータウン東部などで10m前後の段丘崖が残存する。小野ニュータウン東部に広がる平坦面の保存はよく、迎田上発掘区が立地している。

段丘の構成層：明美累層（市原ほか,1958:1960）；新期明美礫層（那須・天白, 1987）の一部に相当する。

対比：低位明美面（市原ほか,1958:1960）、淨谷面（河名, 1973）、低位明美面群（那須・天白, 1987）に比定される。



図9 YD 3面の地形

名称：YD 4面

分布：標高90～60m付近に分布し、万勝寺川右岸の淨谷町付近や万勝寺川沿いのM Y丘陵ブロックの北部北縁斜面と小野ニュータウンに広がる平坦面で、北西方向に緩く傾斜する傾向がある。

特徴：YD 4面は本地域の中位段丘面として川沿いの台地面を構成し、最も発達がよい。段丘崖は比高10～5m前後で、焼山古墳付近などで顕著である。万勝寺川沿いや小野ニュータウン付近に広がる平坦面の保存が良く、焼山古墳群などが立地している。

段丘の構成層：小野礫層（市原ほか, 1958:1960）の一部に對比される。

対比：小野面（河名, 1973）の一部に比定される。



図10 YD 4面の地形

名称：YD 5面

分布：標高50m付近に分布し、万勝寺川右岸や万勝寺川沿いやM Y丘陵ブロックの北西縁斜面に広がる平坦地である。

特徴：YD 5面は本地域の中位段丘面を構成し、段丘面上には小野市街地や市場古墳群が立地している。

段丘の構成層：小野礫層（市原ほか, 1958 : 1960）。対比：小野面（河名, 1973）、中位段丘面（那須・天白, 1987）に比定される。

(3) 沖積面

谷底平野は、万勝寺川と山田川沿いなどに見られる。万勝寺川沿いのものは幅500m、標高は100～30mである。山田川沿いの谷底平野は幅300m前後で、標高は110～30mである。山田川沿いの谷底平野には、市場・山田口遺跡や山田・先堀内遺跡が立地している。

万勝寺川と山田川沿いに見られる河岸段丘と谷底平野はいつ頃、どのように形成されたのだろうか。河岸段丘は、かつて河川の氾濫原が地盤の隆起運動によって押し上げられ、階段状の地形面を形成すると考えられている。また、第四紀の気候変動によって河岸段丘が形成されるといった考え方も示されている。

万勝寺川と山田川沿いに見られる河岸段丘は南東に分布する段丘ほど、分布する標高が高く、形成された時期も古い。このことは、この地域の大地が上昇することによって絶えず河川が北側に移動したことを示し、段丘形成の非対称性は地盤が北西方向に傾きながら隆起していることを物語っている。おそらくこの地域の地形ブロックに南東側に位置する六甲山地の隆起運動に関連して形成された地塊運動の反映なのだろう（図11）。六甲山地が現在のような山地に隆起しはじめたのは、中期更新世のはじめ頃と考えられている。加古川沿いに広がるたくさんの河岸段丘は、このような大地の運動によって形成されたものと思われる。那須・天白（1987）は、加古川流域の地形群は六甲変動の影響による東高西低の傾動を受け、その運動は低位段丘形成期にも継続しているとしている。

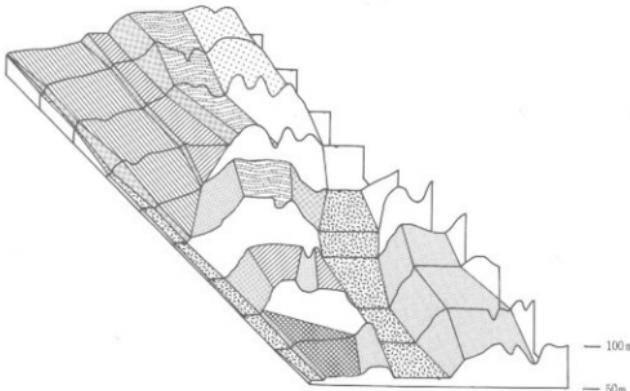


図11 小野市山田町地形ダイアグラム

高位段丘面と考えられるYD1やYD2面に見られる赤土化した化石土壤は、最終氷期以前の間氷期の温暖な気候下で形成されたと考えられている。このことから、この地域の高位面は、後期更新世初頭以前に形成された段丘面であり、赤土化作用の進んでいないYD3～YD5面は最終間氷期以降に形成された段丘であると考えることができる。

各段丘面の解析の度合いや比高、化石土壤等を検討し、河岸段丘の標識地である関東盆地の地形区分に比定すれば、YD1～YD3面はおよそ多摩面に、YD4とYD5面は下末吉面に相当すると考えられる。また人類の文化段階と地形面との関係で言えば、YD1～YD3面は原人段階の文化面、YD4とYD5面は旧人～新人段階の文化面であると考えられる。

加古川流域の河岸段丘群は、近畿圏の第四系分布流域の中で重要な地域の一つであると思われる。それは、旧石器時代の日本海沿岸と太平洋岸や瀬戸内地域の大型哺乳動物群、人類の移動ルートとして、この地域は最良の地理的環境を備えているからである。加古川沿いの自然環境の変遷史を解明することは、この地域の後期旧石器文化の遺跡群の検索・発見および分布の解明のための一つの糸口を提供するであろう。また今後、さらに古い人類遺跡の発見を探るうえで、この地域の高位段丘面には多大な期待が賭けられ、たくさんの興味深いテーマを秘めていると思われる。

(3) 地質

小野山田遺跡周辺の丘陵や台地に分布する地層は、丘陵を構成する砂礫を主体とする扁状地堆積物及び河川堆積物の層相を呈する碎屑性堆積物からなる大阪層群相当層と砂礫層からなる段丘堆積物及びこれらの被覆層としての赤褐色～黄色風化作用を受けたシルト～砂を主とする風成堆積物の層相を呈する土壤層からなる。

従来、遺跡の発掘地に見られる地層や土壤層は、例えば「第1層」といった、番号で表記される名称で呼ばれていることが多く、このような名称法は、数次にわたる遺跡発掘地で遺物包含層や遺構面の対

比を行う場合、不便なことが多い。また地層命名規約上、決して好ましい名称方法ではない。以下に本地域の丘陵構成層、段丘構成層、被覆層の順に地質の概要を述べる。

本地域の丘陵構成層は、砂屑性堆積物からなり、埋蔵文化財の発掘調査対象の土壌層の基盤層を構成している。これらは一般に大阪層群に対比され、明石累層（齊木・前田、1989）と呼ばれており、本報告でも大阪層群相当層として扱う。

小野山田遺跡周辺の丘陵に分布する大阪層群相当層は、褐色の円礫～亜円礫層互層からなり、まれに褐色砂層の薄層を挟在する。礫は直径10～200mmの円～亜円礫からなり、礫種はチャート、硬砂岩、珪質岩、酸性火山岩からなる。礫層は一部で風化が進み、スコップなどで削り取れるほど「くされ礫」化が進んでいる。基質はシルト質粘土～砂からなり礫の風化物を多く含む。本層の地質構造は、ほぼ水平と考えられるが、緩く北西に傾斜する構造も見られる。明確な鍵層に乏しいため、地質構造の詳細は不明である。本層の最大層厚は40m+であると思われる。

小野山田遺跡周辺の丘陵や台地に分布する段丘構成層は、褐色の円礫層からなり、まれに褐色砂やシルト層の薄層を挟在する。礫は直径10～100mmの円～亜円礫からなり、礫種はチャート、硬砂岩、珪砂岩からなる。礫層は一部で風化が進み、「くされ礫化」が進んでいる。基質はシルト質粘土～砂からなる。

各段丘面を構成する礫層は、下位より旧期明美礫層、新期明美礫層、小野礫層（那須・天白、1987）と呼ばれている。段丘構成層の地質構造は、ほぼ水平と考えられるが、日吉町日吉神社付近の道沿いに分布するYD2面構成礫層は緩く北西に傾斜する堆積構造が見られ、上部は赤色土化が著しい。各段丘面を構成する礫層の層厚は20～1m前後であると思われるが、露頭条件が悪く正確な層厚は不明である。

小野山田遺跡周辺の丘陵や台地に分布する被覆層は、一部が発掘調査の対象となる土壌層からなり、西南日本にみられる、いわゆる赤色土及び黄色土層からなる。発掘調査で得られた土壌層の観察から、YD3面に分布する更新世～完新世の風成堆積物からなる堆積物を小野黄色土層と仮称する。

本層の模式地は、迎田上発掘区第32試掘溝断面とし、大道端発掘区の複模式地を第16試掘溝断面に設定する。以下に模式地および複模式地、各試掘溝の層序記載を行う。なお、土壌層の層相記載は、新版標準土色粘土区分（小山・竹原、1995）に従った。

迎田上発掘区第32試掘溝の層序は、下位より小野黄色土層最下部層、下部層、上部層、上部層漸移帶、表土からなる。最下部層は橙褐色風化円礫層からなり直径5～80mmの円礫を含む。礫種はチャート、硬砂岩、珪質岩、酸性火山岩からなる。基質はシルト質粘土からなり基盤起源の風化物を多く含む。層厚は35cm+である。本層の下限は不明であるが、YD3面を構成する段丘礫層に移化すると考えられる。下部層は褐色の風化した壤土（L）からなり、直径5mmの円礫や直径10～20mmの最下部層のブロックを含む。層厚は15cmで、下位層との境界は比較的明瞭である。上部層は黄灰色の風化した壤土（L）からなり、砂粒は中砂粒が優勢である。直径5～15mmの円礫を多く含み、下底に直径2～10mmの炭化木片を含む。層厚は10cmで、下位層との境界は不明瞭で凹凸の形状を呈する。上部層漸移帶は暗灰色壤土（L）からなり、砂粒は細砂粒が優勢である。直径5～10mmの円礫を含み、層厚は8cmである。下位層との境界は明瞭で凹凸の形状が著しい。表土は暗褐色落葉植物片集積層からなり、下底は厚さ数mmの灰色砂粒～中砂粒層からなる。層厚は2cmである。

大道端発掘区の第16試掘溝の層序は、下位より小野黄色土層最下部層、上部層、上部層漸移帶、表土からなる。最下部層は橙褐色風化円礫層からなり直径10～30mmの円礫を含む。礫種はチャート、珪質岩、硬砂岩からなる。基質はシルト質粘土からなり風化による赤色土化が著しい。層厚は18cm+である。上

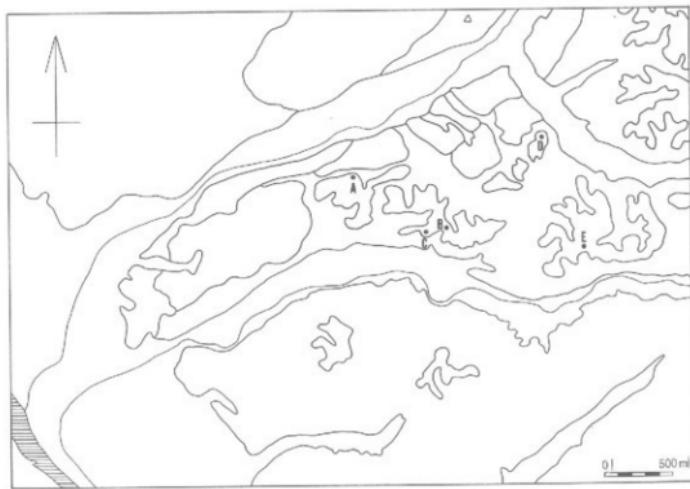
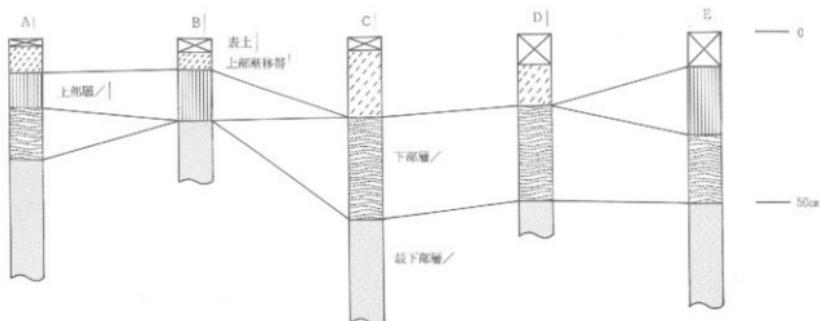


図12 各地形面に分布する被覆層の対比

部層は黄灰色の風化した壊土（L）～重埴土（HC）からなり、直径5～15mmの円礫を含む。層厚は15cmで、下位層との境界は明瞭で凹凸の形状が著しい。上部層漸移帯は暗灰色重埴土（HC）からなり、団粒状構造を呈する。直径5～10mmの円礫を含み、層厚5cmである。下位層との境界は明瞭で凹凸の形状が著しい。表土は暗褐色落葉植物片集積層からなり、下底は厚さ数mmの灰色細粒～中粒砂層からなる。層厚は4cmである。

小野山田遺跡周辺の丘陵や台地に分布する地層の形成史について概観したい。丘陵頂部に見られる大阪層群相当層や高位段丘を構成する礫層は、風化が著しく露頭条件も悪いため詳細な層序は不明である。また各所で赤色土化作用による風化やくされ礫化が進んでおり、丘陵内部の地質構造は不明な点が多い。

YD 1面沿いの斜面で得られた地質断面には、下位より層厚30cmの赤色土化を受けた礫層を切り込んで、層厚20cmの黄褐色シルト質礫層からなる堆積物が斜面を埋め、上位に層厚20cmの黄色土層（おそらく上部層）が堆積していた。おそらく丘陵頂部付近の斜面形成に関わる谷の堆積物を観察したものと推定される。周辺の地理的な条件から、この堆積物は最終氷期に堆積したものと思われ、丘陵頂部の開析が最終氷期まで遡ることは明らかである。つまり大阪層群相当層や高位段丘を構成する礫層は、中期更新世遺構の地盤上昇に伴い丘陵化及び台地化し、數度の間氷期には赤色土化作用を破り、谷の開析を受けて現在の地形面を構成したと考えることができる。

YD 3面を構成する礫層および被覆層は、赤色土化やくされ礫が見られるものの、YD 2面に見られるような著しい赤色土壤化は見られない。段丘面上の被覆層には小野黄色土層が分布し、平坦面上での発達がよい（図12）。おそらくは段丘化後の谷の開析や面の浸食が及ばない期間内に堆積が進んだものと思われる。

YD 5面を構成する礫層は小野礫層と呼ばれ、下流部では西八木層に相当すると考えられる。西八木層は基底礫層、海成粘土層、上部礫層からなる下末吉期の海進堆積物で、基底部からはPalaeoloxodon naumanni（ナウマンゾウ）化石が産出している。

段丘面を覆う古土壤の堆積や下流の地史を考えると、YD 3～YD 5面の段丘化の時期は、最終間氷期の海進期から最終氷期初頭頃の比較的短期間を想定すると都合がよい。段丘面が完全に離水し黄色土層が堆積するのは、ほぼ最終氷期と考えられるだろう。最近十勝ローム層や関東ローム層などの風成堆積物中の細粒物質の起源物質が、大陸からの広域風成塵に求められることが明らかになっている（吉永、1995：1996）。段丘面に分布するシルト～粘土サイズの粒子から構成される小野黄色土層の起源物質も、案外広域風成塵なのかもしれない。

残念ながら今回の発掘調査では、丘陵や台地内で旧石器時代の遺物を検出するに至っていない。YD 3面上の小野黄色土層上部層漸移帯から弥生時代の石鐵を検出したのが、この地域の最も古い人類の足跡の痕跡である。今後は小野黄色土層の層序と旧石器文化の層準、段丘面上の広域火山灰層の検索、黄色土の起源物質の特定など様々な問題について解明を続けていく必要があるようと思われる。

文 献

- 齊本格・前田保夫 (1989) 神戸の地層を読む 2、神戸市教育研究所、神戸、119p.
- 齊本格・佐藤裕司・加藤茂弘 (1995) 播磨地方と初の第四系露頭、人と自然、6,171,196.
- 市原稔・小黒謙司 (1958) 明石層群・播磨層群について、地球科学、40,13-20.
- 市原稔・小黒謙司・衣笠博明 (1960) 明石層群・播磨層群について（その 2）、地質学雑誌、66(780), 605-615.
- 河名俊男 (1973) 兵庫県加古川中流域の段丘地形、第四紀研究、12,38-48.
- 小山正忠・竹原秀雄 (1995) 土壌調査用チャート、新版標準土色帖、日本色研株式会社、東京、14p.
- 那須孝悌・天白俊馬 (1987) 中～上部更新統および完新統、日本の地質、近畿地方、共立出版、東京、157-158.
- 田中眞吾 (1994) 播磨の地形の成り立ちと特色、播磨の地理、自然編、空と海と大地、神戸新聞総合出版センター、神戸、61-130.
- 吉永秀一郎 (1995) 気候変動の指示者としての十勝ローム層の諸性質の変化、第四紀研究、34,345-358.
- 吉永秀一郎 (1996) 関東ローム層中に含まれる微細石英の堆積速度の変化、第四紀研究、35,99-107.

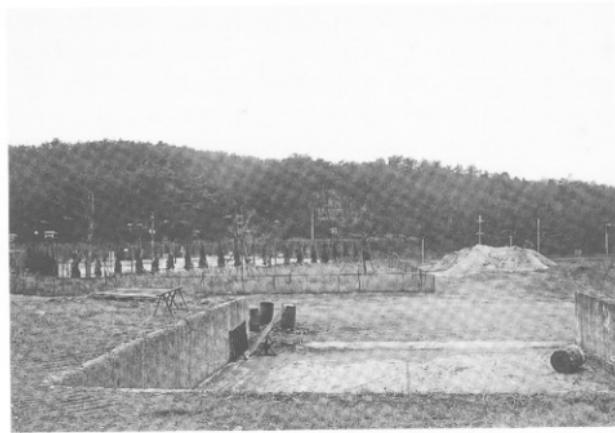


図13 調査地遠景

2. 歴史的環境

小野市は加古川およびその支流によって開拓された平野と河岸段丘から成る丘陵部に分けられる。今までには丘陵部に古墳が、山裾から平野部に弥生時代以降の集落が広がっていると思われていた。ここ十数年の土地改良事業で小野市の歴史も明らかになったことが多い。当地域は『播磨国風土記』の賀毛郡に相当し、今回調査を実施した地点は山田里に相当する。

最も古い遺跡は市城西側の青野ヶ原台地上に所在する鶴池遺跡で、ナイフ型石器と有尖頭器が出土している。また、山田地区北側の浄谷遺跡からも有尖頭器が出土している。縄文時代の遺物は高田小山ノ下遺跡の溝から後期の土器片が僅かに出土しているだけで、不明な点が多い。

遺跡が増加するのは弥生時代になってからである。前期の古い段階の遺跡は確認されていないが、高田古苗代遺跡・高田地蔵ノ本遺跡で前期末の遺物が出土している。高田古苗代遺跡では土坑も確認されている。両遺跡とも中期まで継続し、母集落と考えられている。その他、敷地カノノ下遺跡や高田小山ノ下遺跡・垂井遺跡など東条川と加古川の合流付近に遺跡は多く存在している。特殊な遺跡として高地性集落がある。今まで、西脇市など上流域では確認されていたが、加古川中流域ではじめて確認されたものである。金雞城跡と小田城跡の下層からともに竪穴住居跡が検出されているのがそれである。中世の城跡という同種の立地の場所に築かれている点は興味深い。周辺では当該開発予定地の下流部の南西に位置する市場山田口遺跡で中期の竪穴住居跡が1棟調査されている。長辺5mの長方形プランで2本柱の建物である。

古墳時代になると小野市では焼山古墳群がよく知られている。山田の丘陵から小野市街地へ続く緩斜面・尾根上に築かれた中期末から後期の古墳群で、総数150基以上の大古墳群である。箱式石棺を主体とするものも一部あるが、ほとんど木棺直葬を主体部とする円墳で構成されている。今回の調査対象地も焼山古墳群の東側に位置し、同種の古墳群が存在する可能性が考えられたが、確認できなかった。

小野市域では今のところ前期の古い段階の古墳は確認されていない。中期になって、王塚古墳や敷地大塚古墳が中位段丘面に築かれる。とともに小野周辺域の盟主墳と考えられる古墳である。王塚古墳は径45mの円墳で竪穴式石室を主体部とし、甲冑などが出土している。敷地大塚古墳も径47mの円墳で、埋葬施設は粘土槨で7面の鏡を保有している。2基の盟主墳の周辺には段丘上に50基前後の古墳の存在が知られている。この段丘上には古墳時代の集落も多く見られる。敷地北西遺跡・敷地東遺跡・王子辻内遺跡・王子山ノ下遺跡・王子城ノ下遺跡などである。弥生時代以降この地域が中心部であったことが窺われる。小野市域にはこの時期の前方後円墳は認められないが、三木市には加古川と美嚢川の合流点南側の尾根頂上に愛后山古墳が築かれている。

後期になると、加古川本流に面する尾根上に多くの古墳が築かれている。焼山古墳群の南には市場古墳群・野入古墳群・池尻古墳群・樺山古墳群と続いている。野入古墳群の東側には小規模の円墳で構成される南山古墳群が立地している。北側は段丘裾を取り巻くように南から浄谷古墳群・高山古墳群・久



図14 王塚古墳

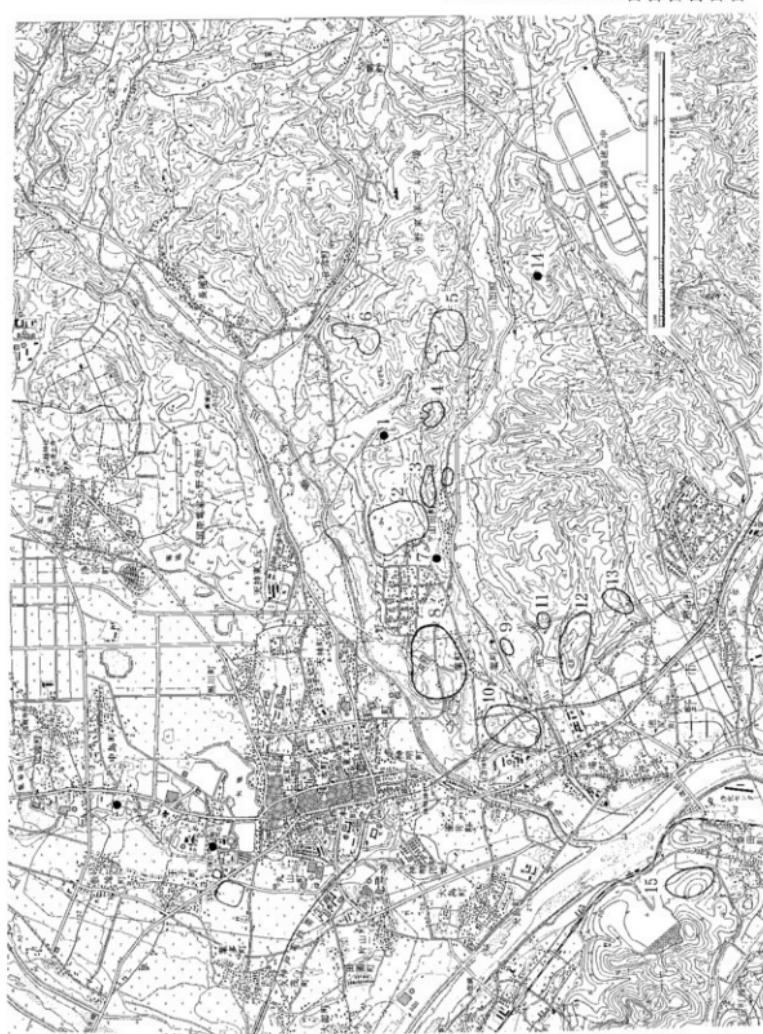


図15 音谷古墳と周辺の遺跡

保木古墳群・南山古墳群・高田古墳群が築かれている。大半の古墳が木棺直葬を主体部とする円墳である。巣山古墳群・野入古墳群の一部で僅かに横穴式石室が見られる。特殊な古墳として、東条川の上流部にカマド塚である船木・中番古墳群が、加古川対岸（右岸）に装飾須恵器が出土した勝手野古墳群が立地している。山田周辺の古墳は小型の木棺直葬を主体部とする円墳が数多く築かれている。今回調査を実施した山田古墳は単独墳と思われ、群集する前のやや古い古墳の可能性が高い。また、計画地南側の丘陵に築かれている山田舟付古墳は箱式石棺だけ

が残されているが、小型の古墳時代終末の古墳かと思われる。この2基以外は現在は認められないが、隣接して焼山古墳群があることを考慮すれば、西側の加古川を望む尾根には古墳が構築された可能性が高いものと思われる。

奈良時代になると、市街地の北側の古墳が集中する中央に小野市では最も古い広渡庵寺が建立されている。広渡庵寺は史跡整備が行われており、中期の古墳群が築かれている中心地域に造営されている。対岸の台地掘に大寺庵寺がやや遅れて建てられ、さらに遅れて平安時代になると河合庵寺も建立される。音谷窯跡はこの時期の須恵器窯跡である。1基だけ短期間に限って操業している。山田川の源となっている鶴池・亀池周辺で以前に土器が採集され、甕を焼いた窯であることからその名が亀池になったとも伝えられている。音谷窯跡と同時期の窯跡が存在するかもしれない。この時期の遺跡はほとんど知られていないが高田小山ノ下遺跡で墨書き土器が出土しているなど今後増加するものと思われる。

中世になると小野市の東半は東大寺領となり、源平の争いによって焼失した東大寺の再建の基盤になった地域である。大部莊として僧重源が活躍しており、浄土寺を中心に活動したようである。山田町でも鎌倉時代に開発予定地の南側に山田先垣内遺跡が営まれる。中山田集落の北側の丘陵裾部で掘立柱建物跡1棟と焼土坑が調査されている。中世の遺物は各地で採集されていることから、この時期の遺跡も多数存在すると思われる。



図16 烧山古墳群

III. 音谷窯跡の調査

1. はじめに

音谷窯跡は、遺跡名は一定していなかったが、早くから知られた遺跡であった。今回、小野山田地区開発事業の計画予定地の中に含まれていることから、確認調査を実施することとなった。遺跡は、開発予定地の中央部の西側に位置する。開発予定地内では最も大きな谷部の南側丘陵である。北側には万勝寺川によって形成された谷が望まれる。小野市天神町字音谷他に所在している。

遺跡は、昭和30年代の東播用水の建設によって知られるようになった。工事の掘削によって窯跡の一部が損壊を受けたものであろう。昭和40年代の県内詳細分布調査の際にも須恵器や窯壁が採集されており、その遺物は現在小野市教育委員会で保管されている。その時の記録等によると、2か所の採集地点があり、複数の窯跡の存在が予測された。遺跡地図には焼山窯跡として記載されている。しかし、その後の現地立会などでは窯跡の正確な位置は不明となっていた。今回も調査前に踏査したが、遺物の採集はできず、窯跡の位置も不明であった。

音谷窯跡も他の遺跡と同様に雑木・下草が繁茂していたことから、伐採作業から開始した。窯跡の正確な位置がわからないことと、工事中の不時発見を避けるためにも、窯跡の構築が予測される地点について、確認トレーニングを設定した。灰原を確認することに主眼を置き、下方からトレーニングを設定し、掘り下げをはじめた。用水路があることや地形が急なこともあって、機械を進入させることができることからも、すべて掘削は人力で行った。

確認調査は3地点を対象として実施した。第18・19・36地点の3地点である。トレーニングは13本設定した。その内訳は第18地点は4本、第19地点は6本、第36地点は3本である。基本的に等高線と平行に設定している。地形に規制された場合などには分割するなどしている。13本のトレーニング調査の結果、第19地点で1基の窯体とそれに伴う灰原を確認したが、1基だけで他には検出できなかった。そのため、今回報告する窯跡は、音谷窯跡として報告する。しかし、今後新たに確認されることも予想されるが、予定地内には存在の可能性が低いことから1号窯跡とはしなかった。

それ以外の地点では木の根などと思われる不定形のピットを数基確認しただけである。遺物も1点だけ窯跡下方で出土しただけである。以前に遺物が採集されたと伝えられる周辺にもトレーニングを設定したが、遺構・遺物ともに認められなかった。東播用水の建設の後にも地形の上方に新しく道が敷設されている。その際などに、破壊され地形も改変されたのかもしれない。現状で見るかぎり、窯跡は存在しないものと考えられる。そのことからも音谷窯跡とした。

確認調査終了後、窯体には土嚢袋などで保護措置を施したのち、埋め戻し作業を行った。確認調査であることから、他のトレーニングについても埋め戻し作業を行った。



図17 音谷窯跡調査風景

2. 外形

窓跡前部に東播用水が東西方向の等高線と平行に通っており、地形が大きく変わっている。東側に谷があり、比高差が大きくなることから、用水路も谷越えはサイフォン型式になっている。その片方の集水部分が窓跡の前に位置している。細かく見れば、用水路部分を中心に改変を受けているが、全体的な地形は想像できる。

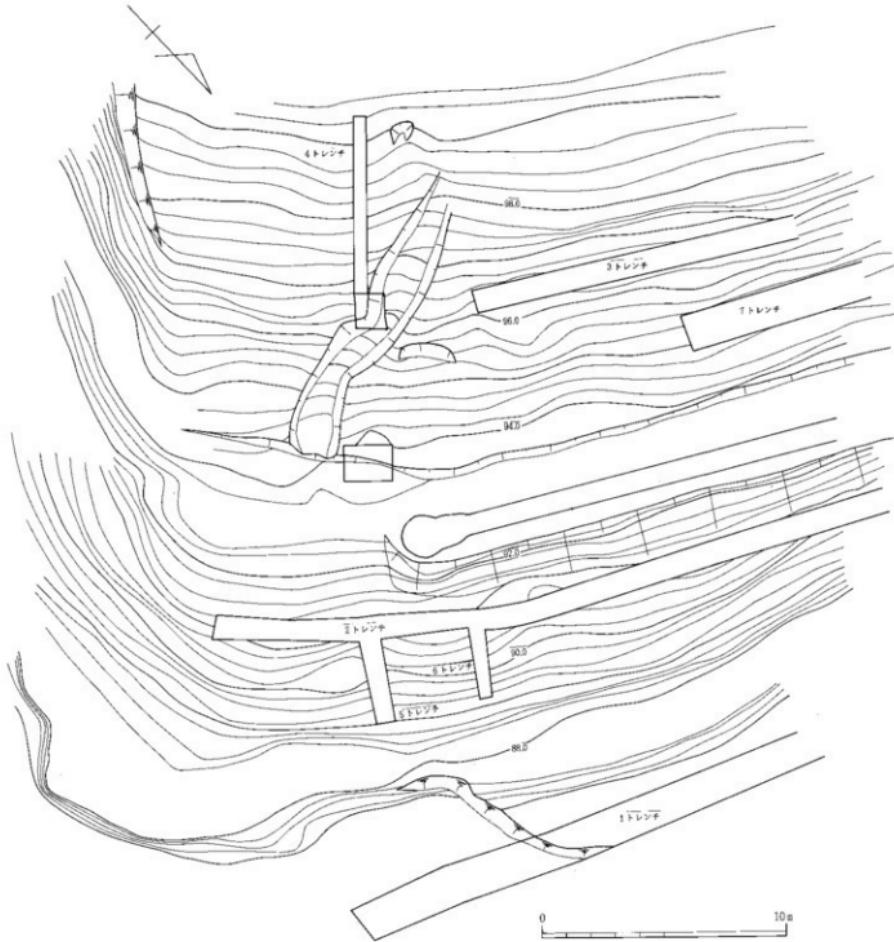


図18 音谷窓跡 地形測量図

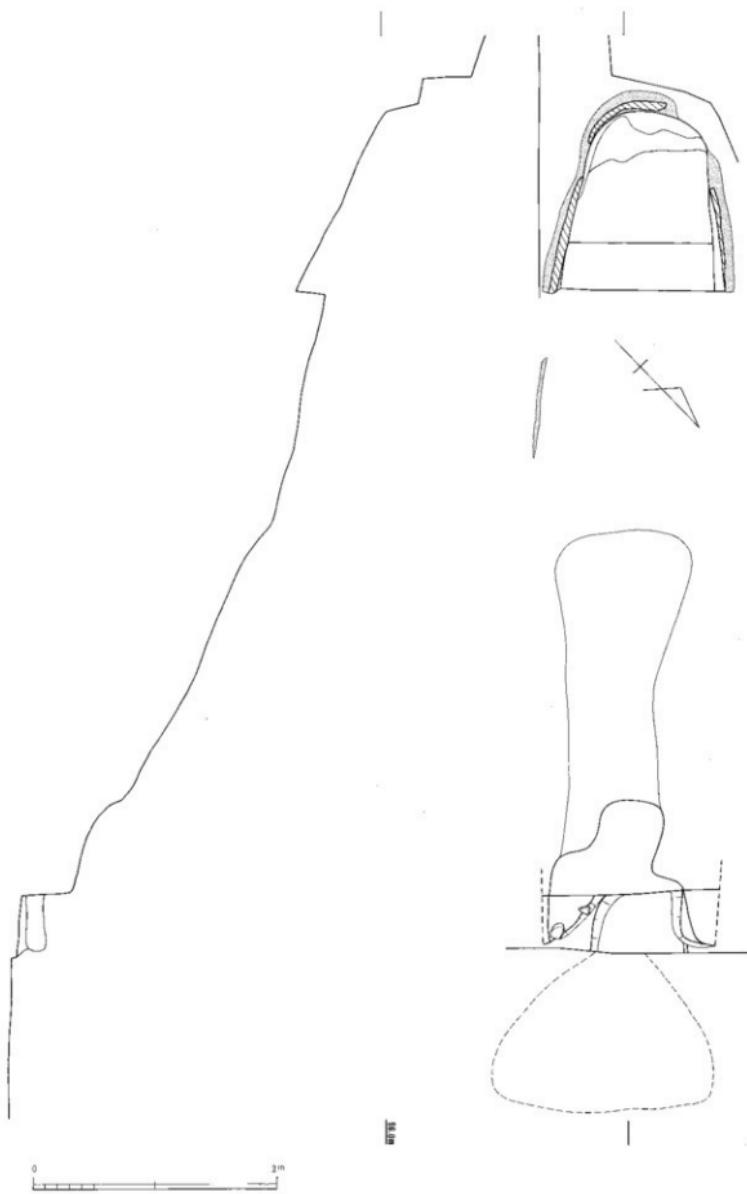


図19 音谷窓跡 窓体実測図

山田町の丘陵は尾根頂部が比較的平坦である。主尾根部に幾つかの谷が形成されているが、概して谷部の斜面は急なところが多い。音谷窯跡が立地している地域も東側の谷に面している方は急斜面となっている。前部から東側約10m付近で地形変換点となっている。谷部は本来の地形以上に急斜面となっているのは、地滑りによるものと思われる。その堆積物が北側の下方に溜まっているものと思われ、平坦面を作っている。窯跡が築かれている部分は、やや緩やかな斜面になる。

窯体の中央部を溝が横切っており、少なからず窯体は損傷を受けている。尾根頂部から北側へ流れる自然の水路になっていたものと思われる。現状では窯跡に伴う溝が重なっている可能性も考えられたが、確認調査のため明らかにはできなかった。窯体に近接しすぎているように思われる。

3. 窯体

確認調査であることから、前部・焚口と煙出し部分しか調査していないが、ほぼ全体像は想定できる。前部は前述したように東播用水によって削平されているが、調査したところ焼土面が確認されたので、ほぼ範囲は確認できる。焚口部中央から正三角形状に広がっている。底辺（北側）で1.8m、高さ1.5mの範囲に焼土面が確認される。

焚口部は、東播用水の工事によって削平された断面で検出された。断面では窯壁は認められないが、被熱して赤化したラインが確認できた。壁面沿いから掘り下げる、約0.5m幅のトレンチとした。調査の結果、平坦面があり、さらに舟底状ピットであろうと思われるピットを検出した。平坦面は、検出した断面では窯体の幅と同じ1.45mの幅を持つが南側の内側に入ると狭くなっている。東側だけは明瞭な段を有している。浅いもので5~8cmの深さを持つ。肩部には地山にも含まれる角礫が2個置かれている。ともに火を受けている。舟底状ピットは幅0.7mで深さは0.22mを測る。長さは窯体部分（南側）を調査していないことから不明であるが、1m前後になろうかと思われる。トレンチ部分では窯壁も確認されたが、1面だけである。遺物は炭・焼土とともに須恵器が数点出土している。

窯体上面は調査していないが、焼土層が表面でも観察されたことから、残存していることは間違いないと思われる。

煙出し部は丘陵上部に設定した4トレンチで確認した。尾根頂部近くから窯体へ向けて設定したトレ

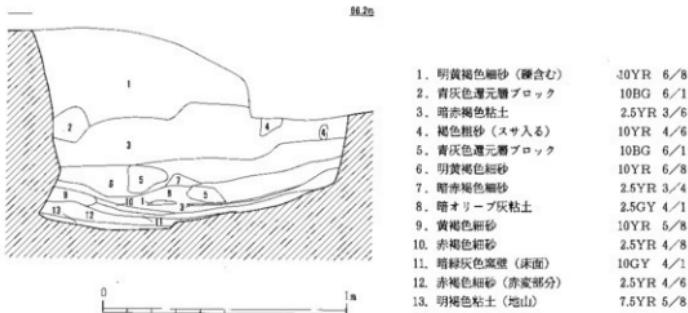


図20 音谷窯跡 窯体土層断面図

ンチで、窯体端部（煙出し部）の位置と上部構造の有無を確認するために入れたトレンチであるが、上部構造の有無については何の遺構も認められなかった。煙出し部の構造を明らかにするために、長さ約1.5mについて調査を行った。窯体底部しか残っていないこともあって、煙出し部も残存状況が良好なわけではない。約0.2m掘り下げられているが、明瞭な施設は認められない。煙出し部の床面の角度は多少急であるが極端に急ではない。煙出し部端部から約0.4mには床面に炭は認められず、強く被熱している。炭残存部分の境界付近だけ窯壁が残っておらず、最も熱を強く受けた部分で崩落したものと思われる。端部から約0.7mのところから遺物は置かれていた。この部分では坯身が主体に置かれている。重ねておらず、各器種が混ざっていることなどから、窯詰め状態ではなさそうである。灰原の比率とは異なり、坯Bの方が多い。原位置を移動していないものは、口縁部を下にして置かれている。

窯体上部に近いところで幅0.4mで断ち割りを行い、床面の枚数の確認を行ったが、1時期の焼成し

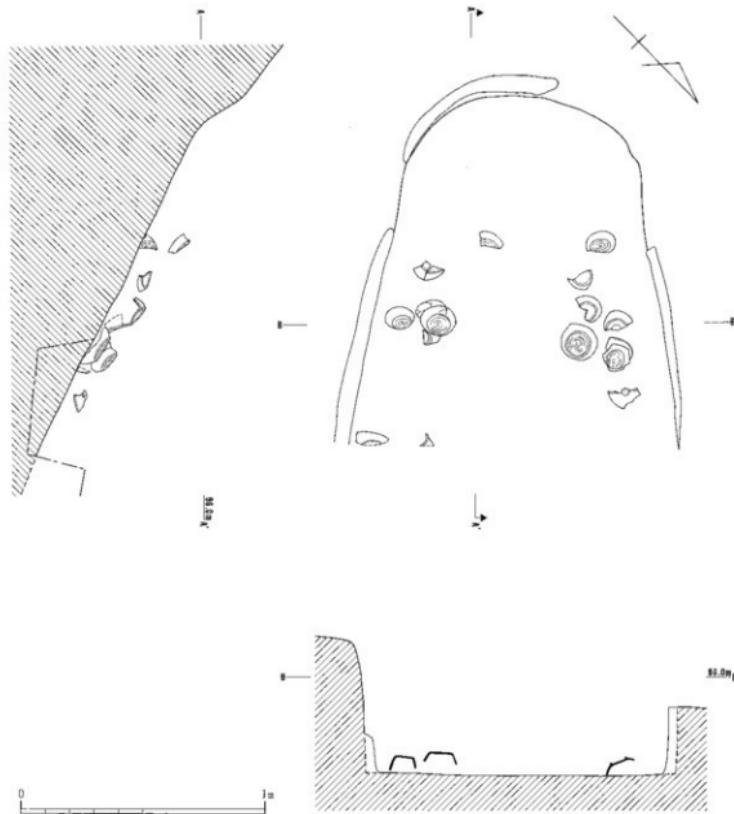
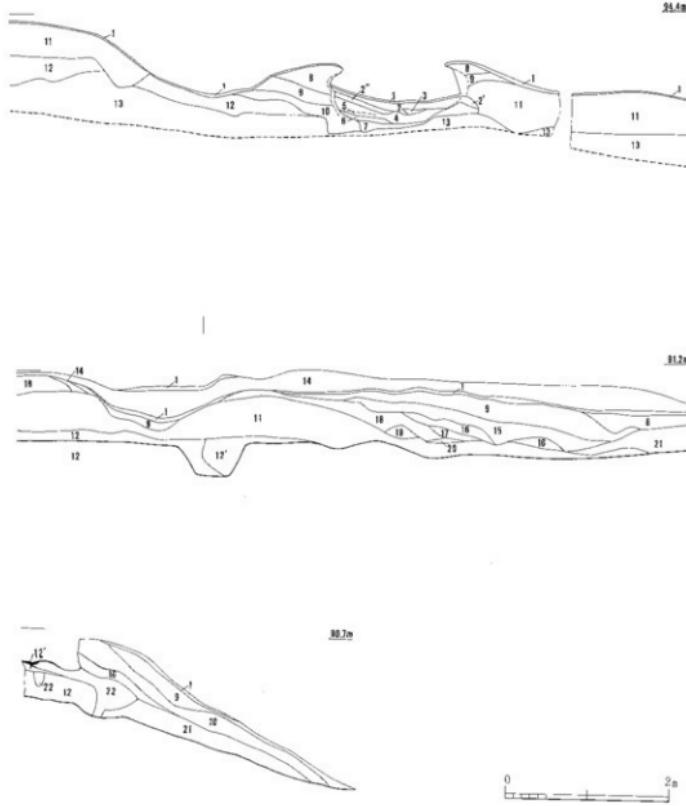


図21 音谷窯跡 窯体遺物出土状態図



1. 表土(褐植土)	12. 明褐色粘土	7.5YR 5/8	
2'. 黄褐色粗砂(2次堆積土)	10YR 5/8	12'. 明褐色粘土(柔らかい)	7.5YR 5/8
2'. 明黄色粗砂(2次堆積土)	10YR 5/8	13. 明褐色砂礫	7.5YR 5/8
2'. 明黄褐色細砂(2次堆積土)	10YR 5/8	14. 黄褐色砂礫(2次堆積土)	10YR 5/8
3. にぶい褐色細砂	7.5YR 5/3	15. 暗赤褐色細砂	5YR 3/3
4. 赤褐色砂礫	5YR 4/6	16. 暗褐色細砂(黒・炭含む)	5YR 4/1
5. 灰色砂礫	10YR 4/1	17. 暗黃色中砂(黒含む)	2.5YR 5/4
6. 黄褐色粗砂	10YR 5/6	18. 黑褐色細砂(土器・炭含む)	5YR 3/2
7. 赤褐色細砂(炭・焼土含む)	5YR 4/8	19. 暗赤褐色砂礫(炭・焼土・窯壁含む)	5YR 3/3
8. 明黄色細砂(黒含む)	2.5Y 7/6	20. 焼土層	10R 2/3
9. 橙色粘質土(黒含む)	7.5YR 6/8	21. 暗黄色中砂(黒含む)	2.5Y 6/4
10. 明褐色粘土	7.5YR 5/8	22. 暗黄灰色細砂	2.5Y 6/3
11. 明黄褐色粘土	2.5Y 7/6		

図22 音谷窯跡 灰原土層断面図

か行っていないことが明らかになった。窯体は全体を調査したわけではないが、両端を調査したことから、規模は把握できた。その数値は長さ6.9mで、幅は1.5mを測る。窯体中央部分の幅は広がるものと推定される。床面の角度は約28°である。

4. 灰原

灰原も窯跡の操業時期が1回であることに比例して小規模のものである。範囲も狭く、堆積も厚くない。そのため、確認調査ではあるが土器量は少ない。

等高線と平行に設定したトレンチによって灰原を確認しようとしたものであるが、灰原を確認したのは3トレンチだけである。その北側の標高の低い部分に設定した2トレンチでは確認できなかったことから、この2トレンチ間で灰原が終息することが明らかになった。その範囲を確定するために2・3トレンチ間に南北方向の地形に直交するトレンチを2本設定して灰原の範囲を確実にした。

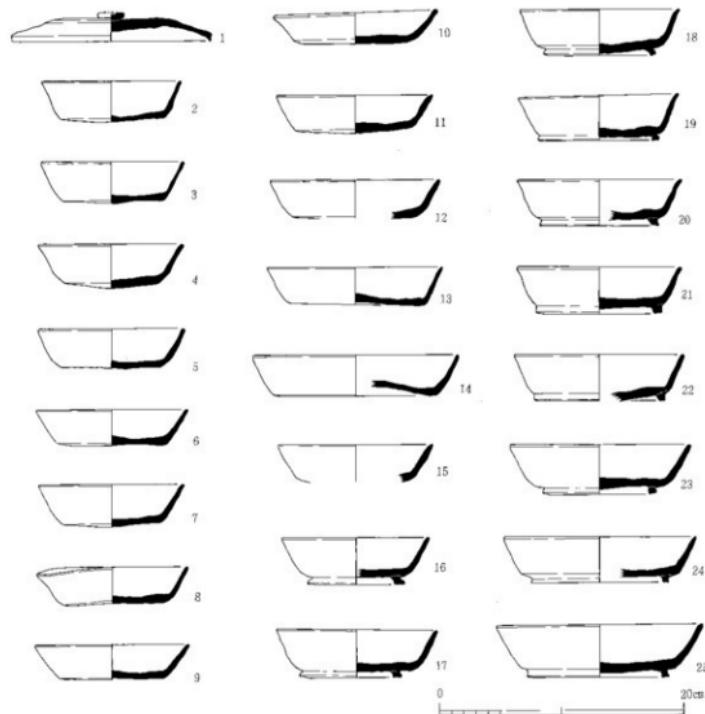


図23 音谷窯跡 出土遺物実測図(1) (窯体)

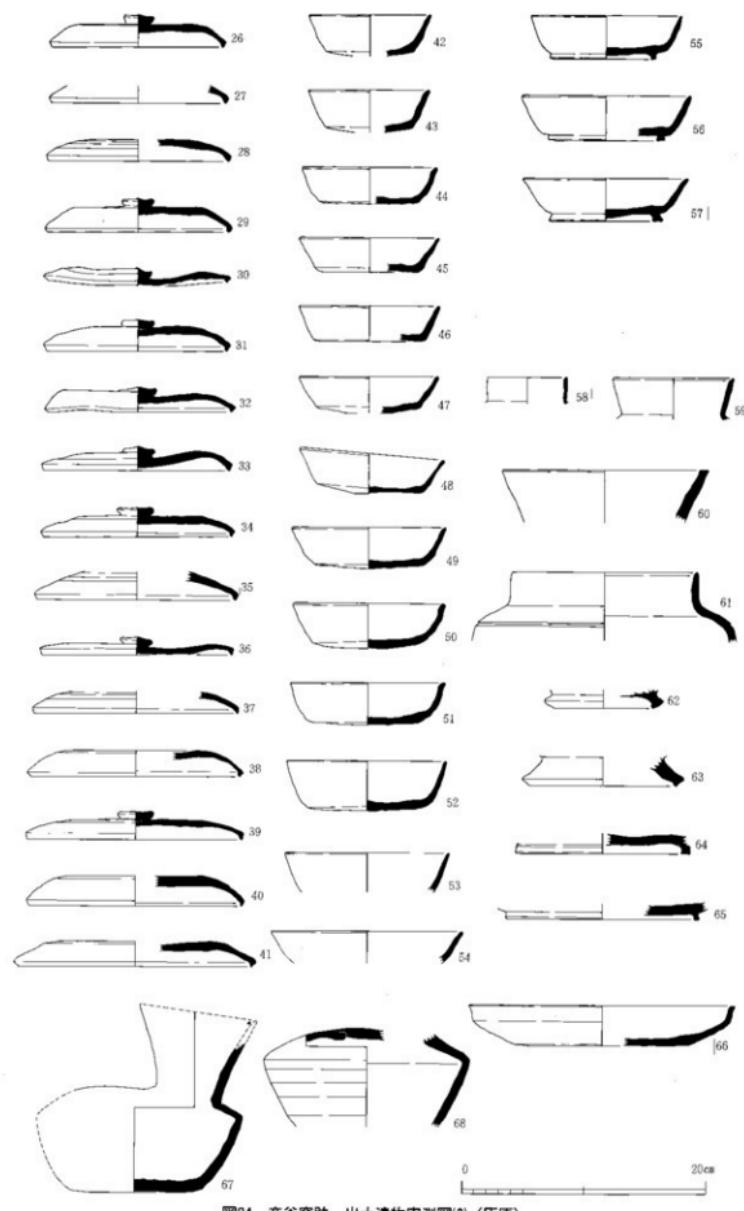


図24 音谷窯跡 出土遺物実測図(2) (灰原)

3トレンチで、東西方向の広がりは4.5mであることが明らかとなった。窯体延長上に窯跡築造前の堆積がみられる。この堆積より西側に灰層は広がっている。灰層と焼土層・炭層があるが、大きさは1時期のもので、その上に2次堆積の層がある。灰原は厚いところでも0.3mは越えない厚さである。全体的に薄い印象を受ける灰原である。南北方向に設定した5トレンチでは、3トレンチに近い部分しか灰層は続いておらず、面的な広がりのない灰原であることが明らかになった。

5. 出土遺物

遺物の出土量は少ない。コンテナ(TS28)で7箱の量である。遺物はすべて須恵器である。床面出土のものを中心に図化し、灰原のものも一部図化した。図化点数は68点である。窯体出土が25点で、他の43点が灰原出土である。

窯体出土土器の器種は环身・环蓋に限られる。环蓋は1点だけである。环身は高台を有するもの(环B)と有しないもの(环A)がある。环Aが14点、环Bが10点である。底部の切り離しはすべてヘラによるものである。高台の形状は、断面方形と台形・両端もしくは外側に肥厚するものと変化がある。

灰原出土の土器の器種は、环蓋・环身・壺・甕・平瓶・皿がある。量的には环蓋・环身が大半を占める。出土土器はコンテナ7箱で、器種のわかるものだけを抽出したものが表3である。

表3 音谷窯跡 出土須恵器分類表

器種	蓋	环A	环B	环	平瓶	壺	甕	皿	合計
点数	1 6 1	8 0	3 4	9 8	2	7	1 7	1	4 0 0
比率(%)	4 0	2 0	9	2 4	0. 5	2	4	0. 5	1 0 0

环を合計すると全体の53%になり、蓋と合わせると全体の93%にもなり、环主体の窯跡と言えるだろう。蓋の口径は直径14~18cmと幅があり、特に集中部分ではなく、幾つかのタイプがあるように思われる。つまみも幾つかの変化がある。中央が比較的平坦なものと尖ったもの、全体に厚手のものなどに分けられる。ただ、タイプは違っても大きさは平均化している。径2.8~2.9cmで高さは0.7~0.8cmを測る。口縁端部やプロボーションにも変化がある。口縁端部は折り曲げるよりも肥厚ぎみの方が量的には多い。环Aは口径10.2~17.0cmと幅があり、最も多いのは12~13cmのものである。1点だけ突出して17.0cmのものがある。重ね焼きの状況の破片も出土している。环Bは集中部分がなく、蓋と同じ傾向である。

6. おわりに

音谷窯跡は、加古川の支流である万勝寺川の南側の河岸段丘上に構築された須恵器窯跡である。確認調査の結果、周辺には他の窯跡が認められない単独の窯跡であることが明らかとなった。操業時期も1時期で、环主体の窯跡である。他に壺・甕・平瓶・皿を僅かに焼成している。窯体内は环に限られている。製品そのものが劣悪とは思われないことから、他の理由によって操業を中止したものと思われる。今のところ小野市域では音谷窯跡前後の窯跡は確認されておらず、地域を大きく移動したか、生産の必要性がなくなったものと思われる。時期は平城Ⅲ式かと思われるが、平瓶は古い様相を示しており、平城Ⅲ式前後であろうかと考えている。

表4 音谷窯跡 遺物観察表

窯体出土遺物

法量の()は復原径・残存高

No.	器種	法量 口径 底径 器高 cm	形態の特徴	技法	備考
1	蓋	(16.4) 2.5	天井部是比较的平坦で直線的にのびる。	天井部はロクロケズリ。口縁部はロクロナデ。内面には仕上げナデ。	器表面荒れる。
2	坏	(11.4) 8.65 3.4	体部直線的にのび、端部は丸くおさめる。底部は平坦でない。	底部へラ切りののちナデ調整。口縁部・内面はロクロナデ。	内外面に自然釉付着。
3	坏	(11.6) 8.3 (3.5)	体部直線的にのび、端部は丸くおさめる。器壁薄い。	底部へラ切りののちナデ調整。口縁部はロクロナデ。	内面自然釉・窯壁付着。 歪み著しい。
4	坏	(11.8) (7.7) (3.65)	体部外反ぎみにのびる。稜は不明瞭。底部器壁厚い。	底部へラ切りののちナデ調整。口縁部・内面はロクロナデ。	歪み著しい。
5	坏	11.95 8.25 3.3	稜が弱く、体部直線的にのびる。	底部へラ切り。 口縁部・内面はロクロナデ。	内外面に自然釉付着。
6	坏	(12.4) (9.1) (2.95)	体部直線的にのび、端部は丸くおさめる。底部は平坦。	底部へラ切りののちナデ調整。 口縁部・内面はロクロナデ。 内面一方方向の仕上げナデ。	
7	坏	11.8 8.3 3.5	稜が弱く、体部直線的にのび端部は丸くおさめる。	底部へラ切りのまま。 口縁部・内面はロクロナデ。 内面一方方向の仕上げナデ。	
8	坏	12.4 8.7 3.0	稜が弱く、体部直線的にのび端部は丸くおさめる。	底部へラ切りのまま。 口縁部・内面はロクロナデ。 内面一方方向の仕上げナデ。	
9	坏	(12.6) (8.5) (2.9)	体部直線的にのび端部は丸くおさめる。	底部へラ切りののちナデ調整。 口縁部・内面はロクロナデ。	
10	坏	13.2 8.8 2.8	稜が弱く、内湾ぎみにのびる。端部丸くおさめ、器高は低い。	底部へラ切りののちナデ調整。 口縁部・内面はロクロナデ。 内面一方方向の仕上げナデ。	歪み著しい。重ね焼の痕跡あり。
11	坏	12.8 9.6 3.2	稜が弱く、体部直線的にのび端部丸くおさめる。底部器壁厚い。	底部へラ切りのまま。 口縁部・内面はロクロナデ。 内面一方方向の仕上げナデ。	
12	坏	(13.8) (10.2) (4.2)	稜が弱く、体部直線的にのび端部丸くおさめる。	底部へラ切りののちナデ調整。 口縁部・内面はロクロナデ。	
13	坏	(14.5) (11.2) (3.2)	体部直線的にのび、端部は丸くおさめる。器壁薄い。	底部ロクロケズリ。 口縁部・内面はロクロナデ。 内面一方方向の仕上げナデ。	外面自然釉付着。
14	坏	(16.8) (13.4) (3.4)	体部内湾ぎみにのびる。端部丸くおさめ、稜が明瞭。	底部へラ切りのまま。 口縁部・内面はロクロナデ。 内面不定方向の仕上げナデ。	内面火尋痕。 底部歪んでいる。
15	坏	(12.6) (3.1)	稜が弱く、体部直線的にのび、端部丸くおさめる。器壁厚い。内面に沈線状のものあり。	不明。	茶褐色の付着物あり。 磨滅している。
16	坏	(12.0) (8.0) (3.9)	稜が弱く、体部直線的にのび、端部丸くおさめる。高台部は外方へ肥厚している。	底部へラ切りののちナデ調整。 口縁部・内面はロクロナデ。 高台部はナデで貼り付けた。	

No	器種	法 量 cm	口径 底径 器高	形態の特徴	技 法	備 考
17	壺	13.2 8.5 4.0		縁が弱く、体部直線的にのびる。高台端部は外側へ大きく肥厚している。	底部へラ切り。 口縁部・内面はロクロナデ。	外面一部に自然釉付着。
18	壺	(13.0) (9.2) (3.8)		縁が弱く体部直線的にのびる。端部尖りぎみに外反する。高台断面方形。	底部へラ切りのまま。 口縁部・内面はロクロナデ。 内面一方方向の仕上げナデ。	
19	壺	13.1 9.7 3.7		縁が弱く、体部直線的に近いが僅かに外反する。器壁薄い。高台端部内側に肥厚する。	底部へラ切りのまま。 口縁部・内面はロクロナデ。 内面一方方向の仕上げナデ。	部分的に灰被る。
20	壺	(13.4) (9.6) 3.9		縁が弱く、体部直線的にのび、端部付近で外反する。端部尖りぎみ。	底部へラ切りのまま。 口縁部・内面はロクロナデ。	外面灰被る。
21	壺	(13.3) (10.4) 3.85		縁が弱く、体部直線的にのび、端部付近で外反する。器壁厚い。高台断面方形。	底部へラ切りのうちナデ調整。 口縁部・内面はロクロナデ。 高台部貼り付けのためのナデ。	
22	壺	(13.7) (10.7) (3.8)		縁が弱く、体部直線的にのび、端部丸くおさめる。高台断面方形。	口縁部・内面はロクロナデ。 他は磨滅のため不明。	
23	壺	(14.7) (9.2) 4.1		縁が弱く、体部直線的にのび、端部丸くおさめる。高台断面方形。	底部ロクロケズリ。 口縁部・内面はロクロナデ。 内面一方方向の仕上げナデ。	外面一部灰被る。
24	壺	(15.8) (11.1) (3.9)		体部直線的にのび、端部丸くおさめる。	底部へラ切りのまま。 口縁部・内面はロクロナデ。 内面仕上げナデ。	
25	壺	16.8 11.6 4.4		縁が弱く、体部内湾ぎみで端部丸くおさめる。器壁厚い。高台端部やや外側へ肥厚する。	底部へラ切りのまま。 口縁部・内面はロクロナデ。 内面不定方向の仕上げナデ。	

灰原出土遺物

No	器種	法 量 cm	口径 底径 器高	形態の特徴	技 法	備 考
26	蓋	(14.0) 2.65		天井部は平坦で口縁部に向かって内湾ぎみにのびる。端部肥厚している。	外面はロクロケズリ。 口縁部・内面はロクロナデ。 つまみはナデで貼り付け。	内外面に自然釉・窓壁付着。
27	蓋	(13.5) (1.7)		内湾ぎみにのび、端部は折り曲げて面をなす。	口縁部・内面はロクロナデ。	
28	蓋	(14.8) (1.8)		端部丸みを持ち、つまみ出していない。	口縁部・内面はロクロナデ。 外面はロクロケズリ。	内外面に土器片付着。自然釉もかかっている。
29	蓋	(14.8) 2.8		肩部の縁は明瞭。天井部平坦。端部はやや内側につまみ出している。	口縁部・内面はロクロナデ。 外面はロクロケズリ。	自然釉付着。焼け歪み。
30	蓋	15.0 1.5		器高の低いもので、端部は内側に肥厚している。	口縁部・内面はロクロナデ。 外面はロクロケズリ。 内面は一方方向の仕上げナデ。	焼け歪み著しい。
31	蓋	(14.8) 2.6		天井部から口縁部へなだらかにつづいている。つまみはやや平坦。	口縁部・内面はロクロナデ。 外面はロクロケズリ。	外面灰被る。
32	蓋	15.0 2.05		端部は内側に少し肥厚して、端面は小さい。	口縁部・内面はロクロナデ。 外面はロクロケズリ。 内面は一方方向の仕上げナデ。	歪み著しい。

No	器種	法 口径 量 cm 底径 器高	形態の特徴	技 法	備考
33	蓋	15.4 2.0	端部はとんど肥厚していない。	外面はロクロケズリ。 口縁部・内面はロクロナデ。	歪み著しい。 外面自然釉付着。
34	蓋	(15.5) 2.4	天井部は平坦。端部は内側に少し肥厚している。	口縁部・内面はロクロナデ。 外面はロクロケズリ。 内面は一方方向の仕上げナデ。	
35	蓋	(16.3) (2.3)	天井部から口縁部へ直線的にのびている。端面はやや丸みを持つ。	口縁部・内面はロクロナデ。 外面はロクロケズリ。	
36	蓋	(15.6) 1.5	器高の低いタイプで端部はシャープ。	口縁部・内面はロクロナデ。 外面はロクロケズリ。 内面は一方方向の仕上げナデ。	土器片付着。 歪み著しい。
37	蓋	(16.8) (1.8)	端面の縁は不明瞭。器壁薄い。	口縁部・内面はロクロナデ。 外面はロクロケズリ。 内面は一方方向の仕上げナデ。	
38	蓋	(17.2) (2.15)	天井部から口縁部に緩やかにのびている。端部は内側に大きくつまみ出している。器壁薄い。	口縁部・内面はロクロナデ。 外面はロクロケズリ。	内面火拂痕あり。
39	蓋	(17.6) 2.35	天井部は平坦。緩やかに口縁部にのび、端部は下方につまみ出す。	口縁部・内面はロクロナデ。 外面はロクロケズリ。	
40	蓋	(17.5) (2.5)	天井部は平坦。緩やかに口縁部にのび、端部は内側につまみ出す。天井部の器壁は厚い。	口縁部・内面はロクロナデ。 外面はロクロケズリ。 内面は一方方向の仕上げナデ。	外面灰被る。
41	蓋	(19.2) (2.1)	緩やかに口縁部にのび、端部は内側に肥厚しているが、角張りぎみ。	口縁部・内面はロクロナデ。 外面はロクロケズリ。 内面は不定方向の仕上げナデ。	外面自然釉付着。
42	坏	(9.9) (7.2) (3.4)	やや内湾ぎみで口縁部につづき、端部は丸くおさめる。	底部へラ切りのまま。 口縁部・内面はロクロナデ。	内面灰被る。
43	坏	(9.8) (7.2) (3.5)	稜線は弱く、直線的に口縁部にのびている。	底部へラ切りのまま。 口縁部・内面はロクロナデ。	
44	坏	(11.0) (8.0) 3.0	尖りぎみの端部を持つ。底部は平坦。	底部へラ切りのまま。 口縁部・内面はロクロナデ。	
45	坏	(11.4) (8.1) 2.9	直線的に口縁部にのびている。端部は薄くシャープに仕上げられている。	底部へラ切りのまま。 口縁部・内面はロクロナデ。	口縁部灰被る。
46	坏	(11.6) (9.1) 2.9	直線的に口縁部にのびている。底部は平坦。	底部へラ切りのまま。 口縁部・内面はロクロナデ。	内面灰被る。
47	坏	(12.4) (8.8) 3.0	稜線は弱く、直線的に口縁部にのびている。	底部へラ切りのまま。 口縁部・内面はロクロナデ。	
48	坏	11.8 8.7 2.7	体部は直線的にのびるが、中央の器壁が薄いことから外反しているよう見える。	底部へラ切りののちナデ調整。 口縁部・内面はロクロナデ。	
49	坏	(12.6) 9.0 3.4	内湾ぎみの体部で、端部は外側に外方しながら細く仕上げる。	底部へラ切りのまま。 口縁部・内面はロクロナデ。	
50	坏	12.3 9.4 3.7	稜は弱く、内湾ぎみに口縁部にのびている。	底部へラ切りのまま。 口縁部・内面はロクロナデ。	

No	器種	法 量 底径 器高 cm	形態の特徴	技 法	備 考
51	壺	12.5 8.8 3.5	稜は弱く、内湾ぎみに口縁部にのびている。端部は外反し、丸くおさめる。	底部へラ切りのまま。 口縁部・内面はロクロナデ。	
52	壺	(13.0) 10.0 4.1	稜は弱く、内湾ぎみに口縁部にのびている。端部に近くなるほど薄く仕上げている。	底部へラ切りのまま。 口縁部・内面はロクロナデ。	
53	壺	(13.4) (3.2)	直線的に口縁部にのびている。	口縁部はロクロナデ。	
54	壺	(15.6) (2.65)	直線的に口縁部にのびている。	口縁部はロクロナデ。	外面灰被る。
55	壺	12.3 8.7 3.6	稜は弱く、直線的に口縁部にのびている。高台は断面台形で内側に肥厚している。	底部へラ切りのまま。 口縁部・内面はロクロナデ。 内面は一方方向のナデ仕上げ。	外面灰被る。
56	壺	(13.8) (9.5) 3.8	稜は弱く、直線的に口縁部にのびている。高台は断面台形。	口縁部・内面はロクロナデ。	
57	壺	(13.5) (9.4) 3.55	稜は弱く、直線的に口縁部にのび、端部は外反している。高台は断面台形で内外へ肥厚する。	口縁部・内面はロクロナデ。	重み著しい。 外面自然輪付着。
58	壺	(6.5) (2.2)	直線的に内傾する。端部は尖りぎみ。	口縁部はロクロナデ。	
59	壺	(9.8) (3.3)	直線的に口縁部にのび、端部は外側だけを上につまみあげている。	口縁部はロクロナデ。	
60	壺	(16.0) (4.4)	直線的に口縁部にのびる。端部は角張りぎみ。	口縁部はロクロナデ。	内面に窯印。
61	壺	(15.2) (5.7)	緩やかに胴部から口頭部につながる。口縁部は尖りぎみで直線的。沈線1条。	口縁部はロクロナデ。	外面に窯印。
62	底部	(8.0) (1.5)	高台部のみ。 上面は剥離痕。	ロクロナデ。	外面自然輪付着。 壺か。
63	壺底部	(12.0) (2.45)	高台部のみ。 直線的に外側へ開いている。	ロクロナデ。	
64	高台	(13.0) (1.65)	端部は両側へ肥厚している。	底部へラ切りのまま。 内面は不定方向のナデ仕上げ。	
65	高台	(15.9) (1.4)	高台は幅が小さい。両側に肥厚している。	底部へラ切りのまま。 内面は不定方向のナデ仕上げ。	底部に窯印。 歪んでいる。
66	盤	(21.8) 3.3	底部の稜線不明瞭。体部は直線的で口縁部近くで屈曲する。端部はやや外へ開く。	底部はロクロケズリ。 口縁部はロクロナデ。 内面は不定方向のナデ仕上げ。	内面灰被る。
67	平瓶	(9.5) 10.0 15.5	体部上面は膨らみ、下半との稜は明瞭。口縁部は大きくなれない。	底部はヘラ切りのまま。 口縁部はロクロナデ。 体部はロクロケズリ。	
68	平瓶	(8.1)	胴部の円板充填明瞭。	体部上半・内面はロクロナデ。 体部下半はロクロケズリ。	

IV. 確認調査結果

1. 迎田上遺跡

(1) 平成7年度の調査結果

①迎田上遺跡の位置と調査方法

迎田上遺跡は小野市の南東部に位置し、山田川上流右岸の標高は70～90mの丘陵地である。現況は山林であったため、伐採作業を実施したのちにトレンチを3本（第23・32・35トレンチ）、尾根頂部の平坦面に設定した。各トレンチとも幅1.5mを基本として、長さは第23トレンチが80m、第32トレンチが120m、第35トレンチが100mである。遺構が検出された第23トレンチでは幅を一部3～5mに拡張した。遺物の出土した第32トレンチでは第32-2トレンチ（長さ30m、幅3m）と第32-3トレンチ（長さ10m、幅2m）の2本を追加して確認調査を行った。掘削はすべて入力によって行った。

②調査結果

基本層序はつぎのようになっている。層厚は第32トレンチでの観察所見である。

第1層 暗灰色シルト質細粒砂。表土。層厚6cm。

第2層 黄灰色シルト質細～中粒砂。層厚10cm。

第3層 褐色シルト質細粒砂。層厚5cm。

第4層 橙褐色基盤風化土。層厚25cm以上。

第5層 橙褐色円礫。基盤。層厚10cm以上。

第5層まで掘り下げたのは第32トレンチのみである。他のトレンチでは第2層までしか掘り下げを行っていないが、地形や隣接地の確認調査の観察所見等から判断して、下層の状況は第32トレンチと大差ないと考えられる。

次に各トレンチの検出遺構・出土遺物についてみると、第23トレンチでは第2層上面で焼土坑1基を検出した。平面形は長辺4.4m、短辺2.4mの中央部が膨らむ長方形である。長軸の方向はN72°Wである。底面は平坦で、中心部には長径約0.9m、短径約0.4mのいびつな楕円形の窪みが1個所検出された。埋土中には炭化木片が混じっており、特に底面直上にはほぼ全面で炭化物層が確認できた。また、底面は熱を受けて赤く変色しており、土坑内部で木材などを焼いたものと判断される。遺物は出土していない。時期・機能とも不明であるが、機能についてあえて可能性をあげると、伏せ焼きを行う木炭焼成窯



図25 迎田上遺跡 第23トレンチ全景



図26 迎田上遺跡 第32トレンチ全景



図27 迎田上遺跡 トレンチ配置図 (1 : 4000)

に形態が似ている。

第32・32-2・32-3トレントでは遺構は検出できなかつたが、第32トレントでは少量の須恵器と石鎌1点が、第32-2トレントでは土師質土器1点と少量の陶器が、第32-3トレントでは少量の須恵器が出土した。出土層はすべて第1層である。

須恵器はすべて細片のため器形・時期とも判断が難しい。土師質土器は器壁の薄い皿の底部で、糸切り痕が残る。陶器は2個体以上あり、器形のわかる1個体は碗または皿の底部である。底部内面に蛇の目軸剥ぎを施したもので、近世後半以降のものと考えられる。石鎌は安山岩製で、調整加工が器体中央まで及ばないことなどの形態的特徴から弥生時代に属する可能性が高いと考えられる。

第35トレントは周辺で窯跡を採集した地点で、窯跡が存在する可能性が考えられたが、遺構・遺物とも確認されなかった。

③小結

第23トレントでは時期不明の焼土坑1基が検出された。関連する遺構が付近に存在する可能性があり、さらに周辺で第2次確認調査が必要であろうと思われる。

第32トレントでは遺構は検出されなかつたものの、弥生時代以降複数時期の遺物が出土した。トレント南側の平坦面を中心に遺構が存在する可能性が高く、さらに確認調査を追加して行う必要があろうかと思われる。

(沖 翁明)

(2)平成8年度の調査

①遺跡の位置と調査方法

迎田上遺跡は小野市の南東部、加古川中流域左岸の丘陵地帯にある。この丘陵の北側を万勝寺川、南を山田川がそれぞれ西に流れて小さな谷を形成し、加古川本流に合流している。2つの小河川に挟まれた丘陵は、東西5km、南北1.3kmの細長い丘陵で、迎田上遺跡はその西側に位置している。標高は70～150mで、谷部との比高差は20～30mを測る。頂部の地形は平坦で雑木が繁茂している。

調査は、尾根の4箇所の平坦地の雑木・下草を伐採したのち、幅1.5mのトレントを設定した。各地点のトレントの本数は、第23トレントが2本、第32トレントが6本、第33トレントが1本、第34トレントが4本である。このうち、昨年度の第2次第31トレントが2本確認調査が必要とされているのは、第23トレントと第32トレントの2箇所である。

掘削は、第1層の表土部分のみを人力と機械を併用して行い、第2層とそれより下は人力によって行った。埋め戻し作業も人力と機械を併用して行った。

②調査結果

4箇所のトレントの土層はほとんど変化なく、基本層序は下記のようになる。

第1層 褐灰色土（腐葉土含む）。表土。層厚6cm。

第2層 にびい黄橙色粘質土。 層厚10cm。

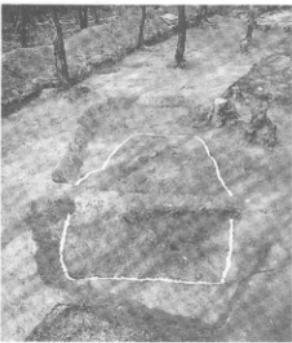


図28 迎田上遺跡 第23トレント 焼土坑

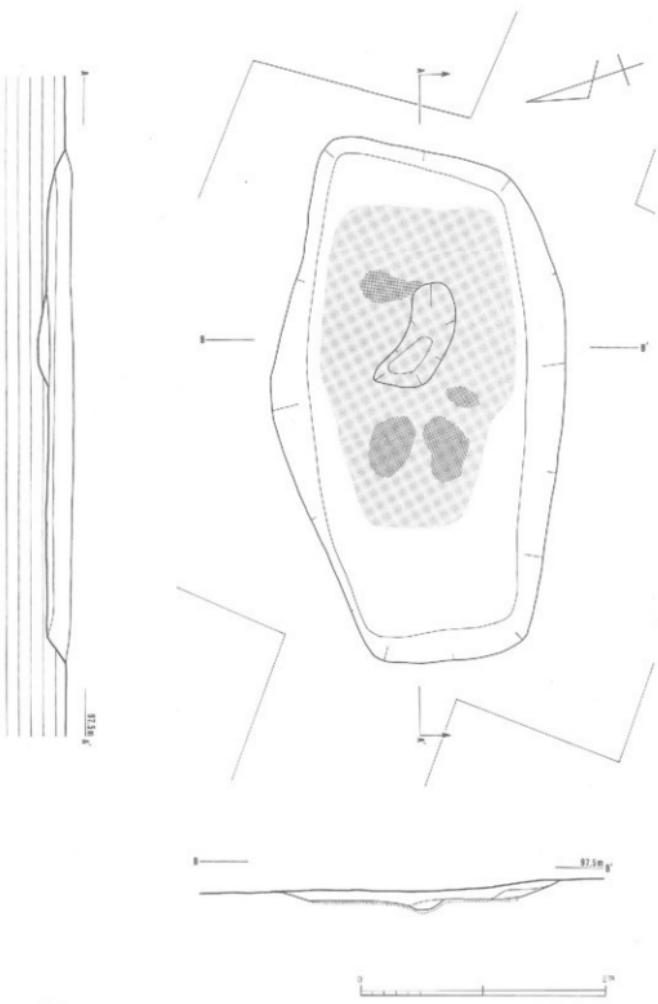


図29 迎田上遺跡第23トレンチ 焼土坑 実測図

- 第3層 明黄褐色土。 地山。層厚30cm。
第4層 明黄褐色疊混じり土。 地山。層厚10cm以上

第3・4層の調査はトレンチの一部に幅1.5m、長さ2m、深さ0.4mのテストピットを設定し、人力で掘り下げたが、各テストピットの土層は概ね共通していた。旧石器時代の遺構を確認するためのものである。

次に各トレンチの結果を見てみると、第23-2・3トレンチは、標高93.7mを測る尾根上の平坦地に昨年度のトレンチと平行に設定した。第23-2トレンチ（長さ41m）は、昨年度のトレンチの南側に位置している。また、第23-3トレンチ（長さ12m）も昨年度のトレンチの南側に位置している。ともに部分的に旧石器確認のテストピットを幾つか設定し、第3層・第4層の掘り下げを行った。しかし、遺構・遺物は全く出土しなかった。

第32-4～9トレンチは、標高93.0mを測る尾根頂部の起伏の少ない平坦な地点に設定した。9本のトレンチの総延長は259.5mである。昨年度遺物が出土した北側のやや高い部分にトレンチ（32-4・5トレンチ）を設定した。トレンチの地山上面で浅い溝状落ち込みのプランを確認し、掘り下げた結果、幅約2m、深さ0.3m余り、断面が逆台形の自然流路を確認した。この流路の性格・規模と周辺に関連する遺構が存在する可能性を求めるために4本のトレンチを追加して調査した。その結果流路は、東西の長さ30m、西端の幅約0.2m、深さ約0.1mと西側にいくに従い狭く浅くなり、消滅するかのような形状が窺えた。この他流路周辺からピット等の遺構は何も確認されず、地山面も平坦になりつつある。

遺物は、埋土中からわずか6点の須恵器片が出土しただけである。須恵器の器種は、9世紀後半～10世紀の环身口縁部、長頸壺肩部、底部（糸切り底）である。

第33トレンチは、第32トレンチを設定した同じ平坦面の南側に位置しており、標高92.6mを測る起伏の少ない東西方向の尾根の頂部である。総延長68mを測る。遺構はまったく確認されなかったが、遺物は表土から須恵器片が3点出土している。

第34トレンチは、第32トレンチから北側に派生している尾根上の平坦面である。北側の谷部は加古川の支流である万勝寺川が流れおり、昨年調査した第35トレンチが標高の高い部分に位置している。標高65.9～74.1mの北向き緩斜面にトレンチを3本設定した。トレンチの総延長は217mである。表土から約0.2m掘り下げると地山の赤褐色疊混じり粘質土に達する。地山上面で幅6m、深さ0.5mの窪みを検出したが、平面形や土層断面から自然地形の窪みと考えられる。他の遺構は検出されず、遺物も出土していない。

③小結

今回の調査は、昨年度調査を行って不明だった2個所の第2次確認調査と新たな2個所の確認調査であった。第2次確認調査の結果、第32トレンチでは溝（自然流路）が確認されたが、それ以外の遺構は確認されなかった。つまり、遺構の分布は拡大することはなかった。流路出土の遺物も希薄で、包含

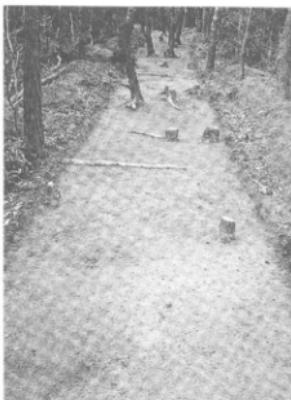


図30 迎田上遺跡 第32-5トレンチ 全景

層も確認できなかった。第33トレンチでも若干の遺物が出土しているが、表土からの出土で遺構は確認できなかった。

迎田上遺跡は、弥生時代から先人は足を踏み入れたものの、居住域や墓域という一定した利用方法がなされなかつたのではないかと思われる。

(今村道雄・川口洋平)

(3) 出土遺物

2年度の調査で弥生時代から近世の遺物が出土している。弥生時代の遺物は安山岩製の石鎌1点だけである。作りは丁寧とはいえない。次の時期は古墳時代から奈良時代にかけての須恵器で壺と短頸壺が出土している。一部もう少し新しくなる糸切りの碗底部も含まれている。この間の遺物が最も量的には多い。その後は近世の陶磁器まで時期が開くようである。

(渡辺)

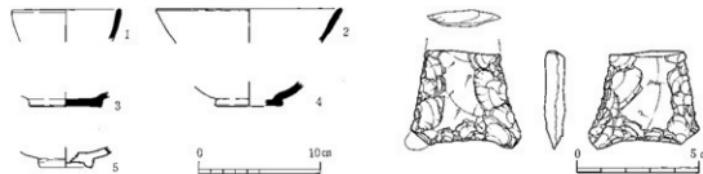


図31　迎田上遺跡　出土遺物実測図

2. 観音谷遺跡

① 遺跡の位置と調査方法

観音谷遺跡は小野市山田町字観音谷・東山・無量谷に所在する遺跡である。調査地点は小野市の南東部に位置し、加古川の支流である山田川上流右岸の標高約70~90mの丘陵地である。現状では山林であったため、樹木の伐採作業を実施した後にトレンチを3個所、尾根頂部に設定した。各トレンチとも幅1.5mを基本として、長さは第20トレンチが58m、第21トレンチが33m、第22トレンチが61mである。第22トレンチは、尾根の形状・地形を勘案して4つに分割した。第22トレンチでは遺物や遺構が検出された。なお掘削はすべて人力によって行った。

② 調査結果

調査地で遺構が検出されたのは第21トレンチおよび第22-2トレンチである。第21トレンチで検出された遺構は集石遺構1基である。これはトレンチの西部に位置する11個の亜円碟～円碟よりなる。碟は長径8~13cm、短径8cmで、基盤の大坂層群起源の礫種で構成されている。

第22-2トレンチで検出された遺構は、礎石建物1棟および配石を伴う土坑2基、土坑1基である。これらの遺構群は、第1号祠跡、第1・2号配石土坑、第1号土坑と呼ぶ。

第1号祠跡は、トレンチの東部に位置する6個の礎石よりなる建物遺構である。建物は2間×2間で構成され、1間は88cmである。礎石は長径26~30cm、短径16~20cmの灰色酸性火成岩類で構成され、石

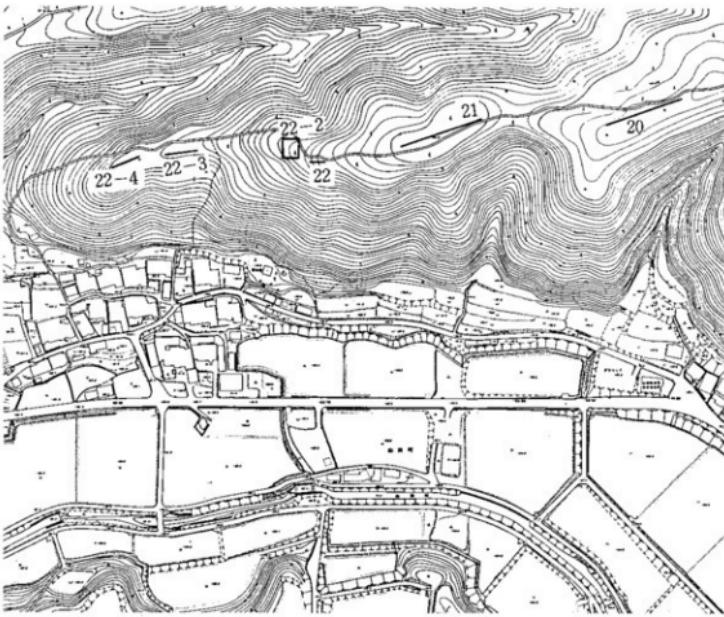


図32 観音谷遺跡 トレンチ配置図 (1:4000)

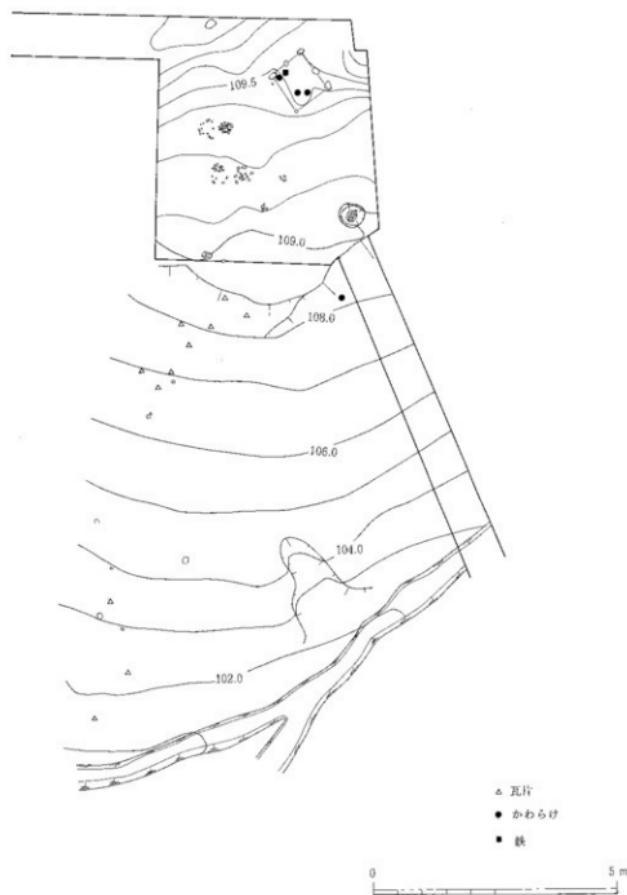


図33 観音谷遺跡 第22-2トレンチ 平面図

の角は加工を受け磨耗している。また直径10~16cmの礎石の根固め石の可能性のある亜円礎が見られる。遺構の立地する尾根は、地元で通称「祇園様」と呼ばれ、現在も町内の信仰の場となっている。

出土遺物は近世~近代の時期に属すると思われる陶器片や鉄製品が出土した。また遺構の周辺には多量の瓦片が堆積しており、その一部は熱を受けた赤褐色の高温酸化皮膜が見られる。遺構の帰属時期は、遺物や山田町内の聞き取りなどから近世後期の可能性が高く、この地域が大正年間に火災にあったことを考慮すると、この遺構はその際の焼失後廃絶された祠である可能性が高い。



図34 韶音谷遺跡 第21トレンチ 石組実測図



図35 韶音谷遺跡 第22-2トレンチ 全景

第1・2号配石土坑は、亜円礫～円礫により上部を埋設された土坑であり、礫は長径15cm、短径10cm程度で、基盤の大坂層群起源の礫種で構成されている。遺構の覆土は暗灰色重埴土からなり、多量の焼土塊と炭化木片を含有する。底面の形状は比較的平坦で、出土遺物は近代以降の時期に属すると思われる陶磁器の破片が出土した。遺構の帰属時期は、遺物から近代以降と思われ、大正年間の火災後の投棄穴である可能性が高い。

第1号土坑の覆土は暗灰色重埴土からなり、焼土塊と炭化木片を含有する。底面の形状は円形で、出土遺物はなかった。遺構の帰属時期は、第1・2号配石土坑と同様である可能性が高い。

③小結

今回の調査で、第22トレンチで祠跡と考えられる礎石建物が検出され、その建物起源の瓦や遺物の分布は丘陵頂部や周辺斜面に限定されている。現在中山田に所在する観音堂の前身や行場なども周辺に存在する可能性が高く、一帯が近世に信仰の場であったことが明らかになった。

(矢口 裕之)

文献

田中真吾 (1994)『播磨の地理 自然編』 神戸新聞総合出版センター, 61-130

松井 健 (1988)『黄褐色森林土 土壌地理学』 筑地書館, 243-244

④遺物

出土遺物は近世のものに限られ、第22トレンチの4本のトレンチから出土している。特に第22-2トレンチとその下方の斜面から多く出土している。大半は瓦と土師器小皿である。瓦は平瓦が大半であるが、図化した3点だけ軒瓦が出土している。軒丸瓦は三巴文で、軒平瓦は菊花文である。1点の軒平瓦には『くろ川』と範に刻まれている。小野市黒川町で瓦生産を行っていることから、地名と思われる。波紋様が菊花文の裏地にあるものとないものがある。

(渡辺)

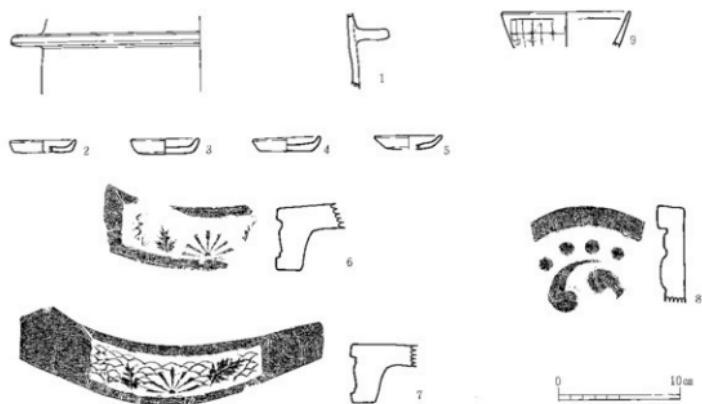


図36 観音谷遺跡 出土遺物実測図

3. 大道端遺跡

①遺跡の位置と調査方法

大道端遺跡は小野市の南東部に位置し、山田川上流右岸の標高は70～90mの丘陵地である。現況は山林であったため、伐採作業を実施したのちにトレンチを6カ所（第12～17トレンチ）、尾根頂部の平坦面に設定した。他遺跡同様に各トレンチとも幅1.5mを基本とした。長さは第12トレンチが43m、第13トレンチが28m、第14トレンチが70m、第15トレンチが101m、第16トレンチが19m、第17トレンチが40mである。遺物や遺構が検出された第13トレンチでは第13-2トレンチ（長さ13m、幅1.5m）を追加し、第15トレンチでは遺構が確認されたことから、第15-2～15-7トレンチの6本のトレンチを追加して確認を行った。追加したトレンチでも遺構が検出されたところは、遺跡の性格を明らかにするため、幅を一部3mに拡張した。掘削作業はすべて人力によって行った。埋め戻し作業も同様に人力で行った。

②層序

調査地に分布する地層は、下位より砂礫を主体とする扇状地堆積物および河川成堆積物の層相を呈する砂質堆積物と赤褐色～黄色の風化作用を受けたシルト～砂を主とする風成堆積物の層相を呈する土壤層からなる。

從来、遺跡の発掘地に見られる地層や土壤層は、例えば「第1層」といった、番号で表記される名称で呼ばれていることが多いが、このような名称法は、数次にわたる遺跡発掘地で遺物包含層や遺構面の対比を行う場合、不便なことが多い。また地層命名規約上、決して好ましい名称方法ではない。

発掘地に見られる砂質堆積物は調査対象の土壤層の基盤を構成し、大阪層群に対比されている（田中、1994）。発掘調査の対象となる土壤層は、西南日本にみられる赤色土及び黄褐色森林土層（松井、

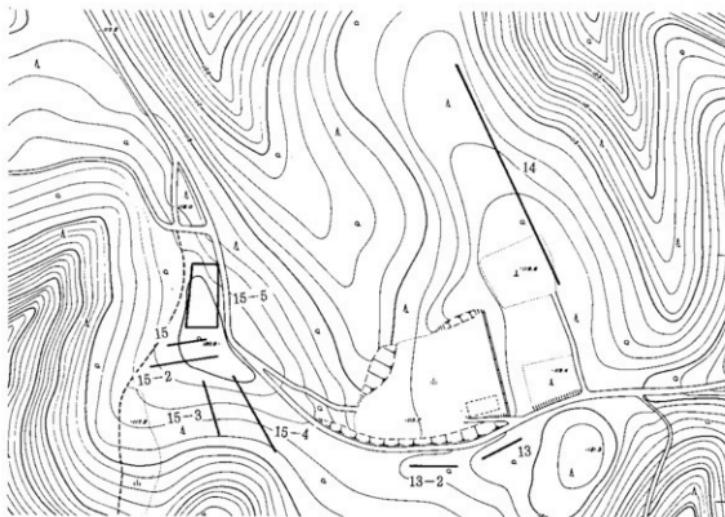


図37 大道端遺跡 トレンチ配置図 (1 : 2000)

1988) からなる。調査地に分布する土壤層は、大阪層群を基盤とする開析を受けた丘陵地頂部に残存する更新世～完新世の風成堆積物からなり、この堆積物を小野黄色土層と仮称する。

本層の模式地は、迎田上遺跡第32トレンチ断面とし、大道端遺跡の複模式地を第16トレンチ断面に設定する。以下に模式地および複模式地、確認トレンチの層序記載を行う。なお、土壤層の層相記載は、新版標準土色帖のTexture differentiationに従った。

迎田上遺跡第32トレンチの層序は、下位より小野黄色土層最下部層、下部層、上部層、上部層漸移帶、表土からなる。最下部層は橙褐色風化円礫層からなり直径5～80mmの円礫を含む。礫種はチャート、硬砂岩、珪質岩、酸性火山岩からなる。基質はシルト質粘土からなり基盤起源の風化物を多く含む。層厚は35cm+である。

下部層は褐色の風化した壤土(L)からなり、直径5mmの円礫や直径10～20mmの最下部層のブロックを含む。層厚は15cmで、最下層との境界は比較的明瞭である。

上部層は黄灰色の風化した壤土(L)からなり、砂粒は中粒砂が優勢である。直径5～15mmの円礫を多く含み、下底に直径2～10mmの炭化木片を含む。層厚は10cmで、下位層との境界は不明瞭で凸凹の形状を呈する。

上部層漸移帶は暗灰色壤土(L)からなり、砂粒は細粒砂である。直径5～10mmの円礫を含み、層厚は8cmである。下位層との境界は明瞭で凸凹の形状が著しい。

表土は暗褐色落葉植物片集積層からなり、下底は厚さ数mmの灰色細粒～中粒砂層からなる。厚さは2cmである。

大道端遺跡の第16トレンチの層序は、下位より小野黄色土層最下部層、上部層、上部層漸移帶、表土からなる。最下部層は橙褐色風化円礫層からなり直径10～30mmの円礫を含む。礫種はチャート、珪質岩、硬砂岩からなる。基質はシルト質粘土からなり風化による赤色土化が著しい。層厚は18cm+である。

上部層は黄灰色の風化した壤土(L)～重壤土(HC)からなり、直径5～15cmで、下位層との境界は明瞭で凸凹の形状が著しい。

上部層漸移帶は暗灰色重壤土(HC)からなり、団粒状構造を呈する。直径5～10mmの円礫を含み、層厚5cmである。下位層との境界は明瞭で凸凹の形状が著しい。

表土は暗褐色落葉植物片からなり、下底は厚さ数mmの灰色細粒～中粒砂層からなる。層厚は4cmである。

第12トレンチは小野黄色土層最下部層、上部層、上部層漸移帶、表土からなる。各層の層厚は10+、28、12、9cmである。

第13トレンチは小野黄色土層最下部層、上部層、上部層漸移帶、表土からなり、土壤層の発達は悪い。全体の層厚は28cm+である。

第14トレンチは小野黄色土層最下部層、上部層、上部層漸移帶、表土からなり、土壤層の発達は悪い。全体の層厚は30cm+である。

第15トレンチは小野黄色土層最下部層、上部層、上部層漸移帶、表土からなり、土壤層の発達は悪い。全体の層厚は25cm+である。

第17トレンチは小野黄色土層最下部層、上部層、上部層漸移帶、表土からなり、土壤層の発達は悪い。各層の層厚は30+、30、15、9cmで、第16試掘溝に次いで比較的土壤層の発達がよい。

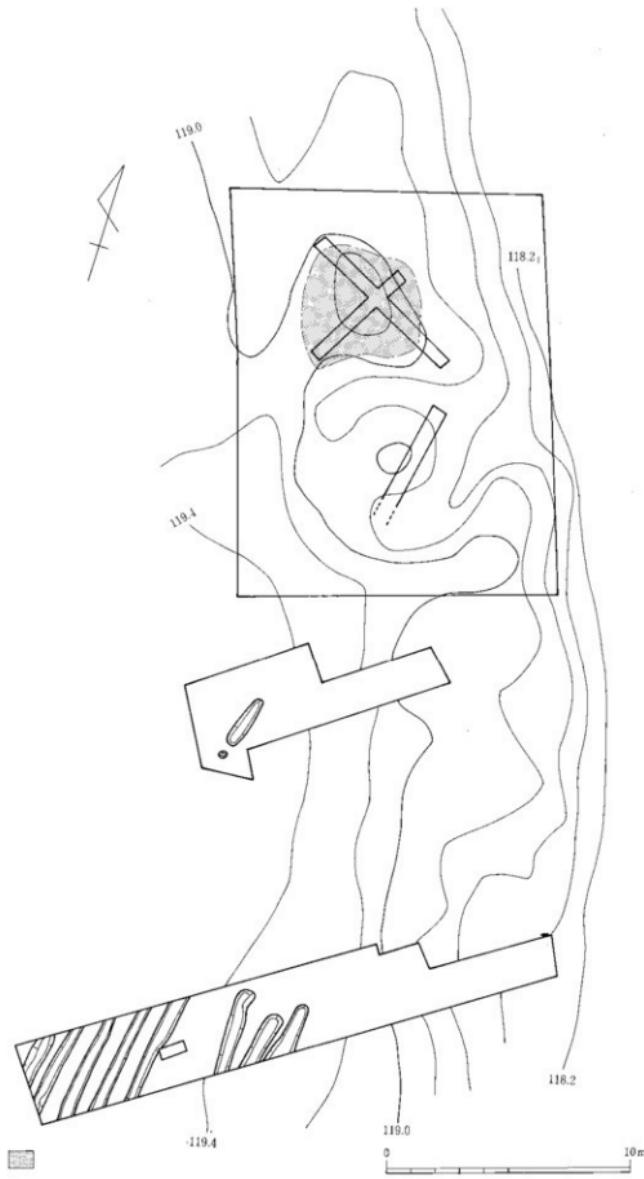


図38 大道端遺跡 第15トレンチ 崩・古墳状隆起平面図

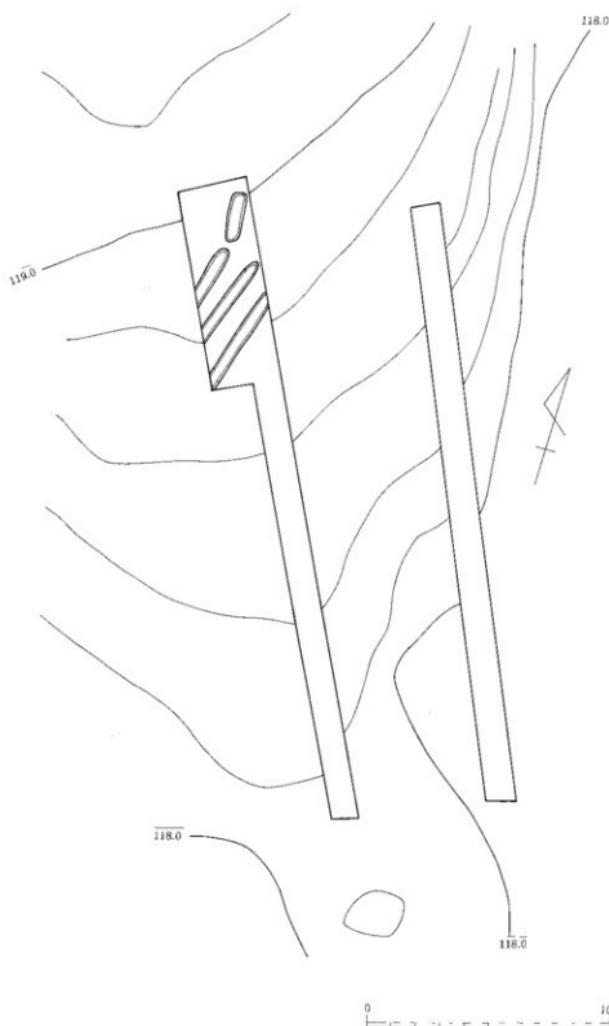


図39 大道端遺跡 第15-3・4トレンチ 施工平面図

③検出された遺構

調査地で遺構が検出されたのは、第13トレンチ、第15トレンチである。検出された遺構は何れも畠状遺構で、第13トレンチの遺構群を第13-1号畠、第15トレンチの遺構群を第15-1.2.3号畠と呼ぶことにする。

第13-1号畠はトレンチの東部に位置し、4条の鋤溝状遺構からなる。遺構の検出は小野黄色土層上部層漸移帯上面であり、遺構の覆土は暗灰色重埴土からなる。遺構の規模は長さ2.6m、幅40~50cmであり、ほぼ南北に直行する。底面の形状は平坦で、出土遺物は近世末~近代の時期に属すると思われる陶磁器の片が出土した。遺構の帰属時期は、遺物から近世末~近代と思われる。

第15-1.2.3号畠は第15-1、15-2、15-3トレンチに見られる13条の鋤溝状遺構からなる。遺構の検出は小野黄色土層上部層漸移帯上面であり、遺構の覆土は暗灰色重埴土からなる。遺構の規模は長さ2.1~5m、幅40~50cmであり、ほぼ南北に直行する。底面の形状は平坦で、出土遺物は近世末から近代の時期に属すると思われる陶磁器の片と表土から磁器製端反り茶碗が出土した。遺構の帰属時期は、遺物から近世末~近代と思われる。
(矢口)

第15-1号畠の北部に古墳状隆起が見られた。一見すると周溝を有する小規模の円墳とその横に付随する小規模の円墳に見えるものである。そのため、3本のトレンチ（第15-5.6.7トレンチ）を設定して調査したが、主体部などは確認されず、遺物もまったく出土しなかった。周溝を有する盛土の方（第15-5トレンチ）は比較的バサバサの土で溝の土を単純に盛ったものと思われる。この結果から古墳時代の遺構とは考えられないと思われる。が、隣接した墳丘状の遺構は、裾部を削り出しており、盛土も2層から成っている。中央部から南にずれているが浅い土坑も確認されている。遺物はまったく出土していないことから、時期決定は困難である。単に盛土をしたわけではなく、ある程度手を加えていることから、意図的な遺構かとも思われる。墓の可能性も考えて周辺を広げたが、他に遺構は確認されず、火を受けた痕跡も認められない。今回の調査では、土盛りされた地形であることは確認したが、やはり遺構の性格・時期は不明である。

④小結

今回の調査で、第13トレンチで畠状遺構群が検出され、調査を広げたところその分布は第13トレンチから第15トレンチ間の丘陵頂部に限定される可能性が高い。近世のある時期に丘陵頂部の平坦面で畑作を行っていたものである。古墳状隆起は明確な結論を得ることはできなかった。2基だけで、他には認められなかった。
(渡辺)



図40 大道端遺跡 畠検出状況



図41 大道端遺跡 古墳状隆起

4. その他の遺跡

①山田古墳

開発計画地南西隅に位置しており、6世紀代の横穴式石室を有しない円墳と考えられていた。古墳は小型（通有）の古墳よりは1回り大きな墳丘であろうと思われていた。昭和60年代の土取りによって周辺の状況が一変しており、古墳の位置も不明の状況になっていた。分布調査では6世紀代と思われる須恵器甕の破片などが採集されていた。古墳が存在したと推定される付近に3本のトレンチを設定して確認に努めたが、すでに削平されたことが明らかになった。北西側丘陵に位置している焼山古墳群との関連や、横穴式石室採用前の古墳であることから、この時期の山田町周辺の古墳文化を考える上で貴重な古墳であったことを考えると惜しまれる。周辺の尾根部分について改めて踏査したが、古墳状の隆起は認められず単独墳であろうと思われる。

（渡辺）



図42 山田古墳 トレンチ全景

②音谷遺跡

尾根頂部の平坦面に2本のトレンチ（No10・11トレンチ）を設定して調査を行った結果、どちらのトレンチからも遺構・遺物は確認されなかった。No10トレンチは標高約130mで現状は山林である。第1層は腐葉土、第2層は粘質のぶい黄褐色土層、第3層は泥炭の明赤褐色粘質土層で地山である。No11トレンチも山林で標高は約130mである。層序もNo10トレンチと同じである。また、トレンチの中央やや東寄りで第1層と第2層の間で厚さ約15cmの焼土層が確認された。椭円形で約2mの範囲に広がっており、焼土坑と考えられるが性格や時期等は不明である。

また、両トレンチとも旧石器時代の文化層の有無を確認するため一部で地山を掘り下げたが、遺物は出土しなかった。（川口）



図43 音谷遺跡 トレンチ全景

③焼山窯跡

開発対象地の南東部分に位置する。調査の方法は他地点と同様で、機械と人力を併用した。トレンチ幅は2mを基本としたが、状況に則して拡大縮小している。トレンチは15本設定した。断面観察の結果、基本層序は表土・明黄褐色土・明茶褐色土・明赤褐色粘質土となっている。明黄褐色土層は尾根頂部において15~30cmの厚さを成しているが、谷底では厚く堆積している。下位の2層には礫が多く含まれていることから、基盤層と考えられる。どの層からも遺物は出土していない。

No.2・4トレンチにおいて地山を掘り込む土坑が各1基、トレンチの壁面にかかる形で検出された。いずれも深さが15cm、直径が1m程度の楕円形を成すと推定され、地表面から土坑の底までは約0.6mを測る。土坑の埋土中には多くの炭化物が含まれるもの、遺物はまったく認められず、時期・性格ともに不明である。その他のトレンチにおいては、遺構・遺物とも検出されなかった。
(目次)



図44 調査地遠景

V. おわりに

小野山田地区の開発に先立って、2年度にわたって確認調査を実施した。震災復興事業として採択され、その一環としての遺跡の調査であった。1995年1月17日に未曾有の被害を出した兵庫県南部地震の復興調査として、日本でははじめて全国的規模で支援を得て発掘調査に対応するシステムができたものである。はじめてのことゆえ、支援を受ける側の兵庫県教育委員会も支援戴いた各都府県の方々にも大きな戸惑いがあったことは事実であろう。その中で見慣れない土を相手に最大限の努力を図って戴き、感謝の念にたえない。

非常時の中で少しでも良い調査を、遺跡の活用をと努めて戴いた。その結果の1つが本書である。まだまだ、不十分な点もあるうと思われますが、ご寛怒下さい。今後、音谷窯跡が保護・活用されることを望むとともに、本書の成果が利用されることを期待するものである。

調査の過程や整理作業の過程で多くの助言・協力を得ました。ありがとうございました。

図版



小野市山田町周辺空中写真（国土地理院撮影）

図版2 音谷窯跡

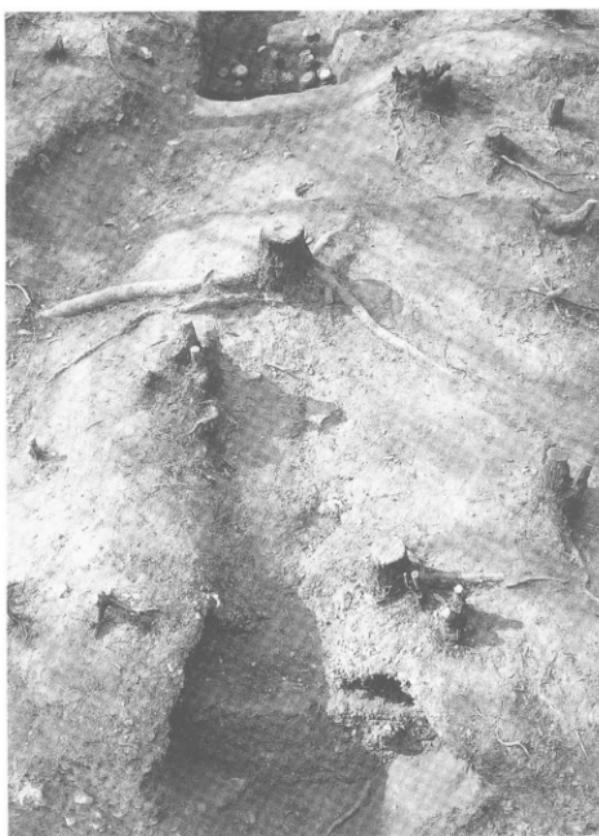


遠景

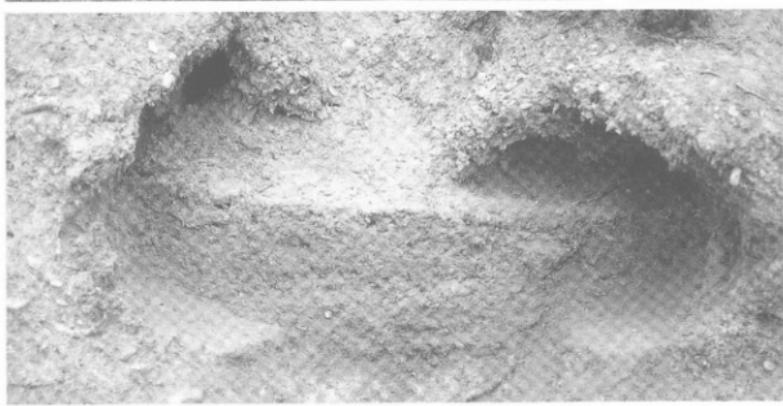


窯体全景

図版3 音谷窯跡

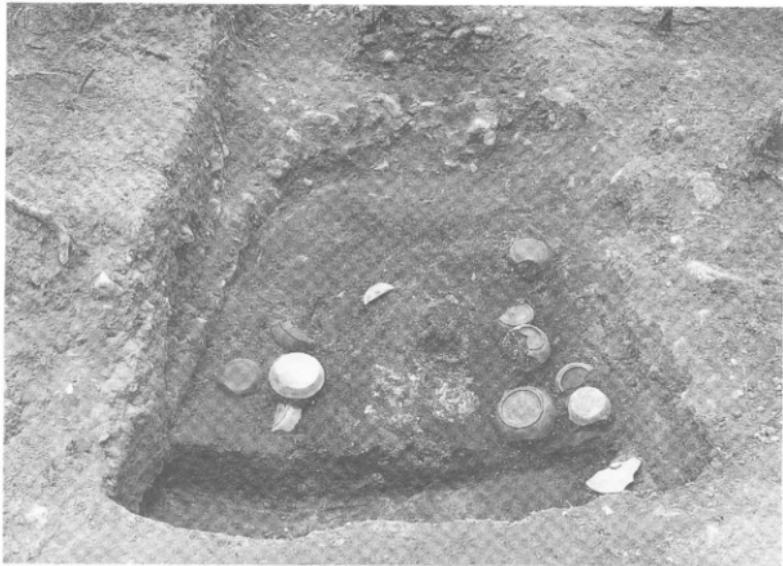


窯体全景

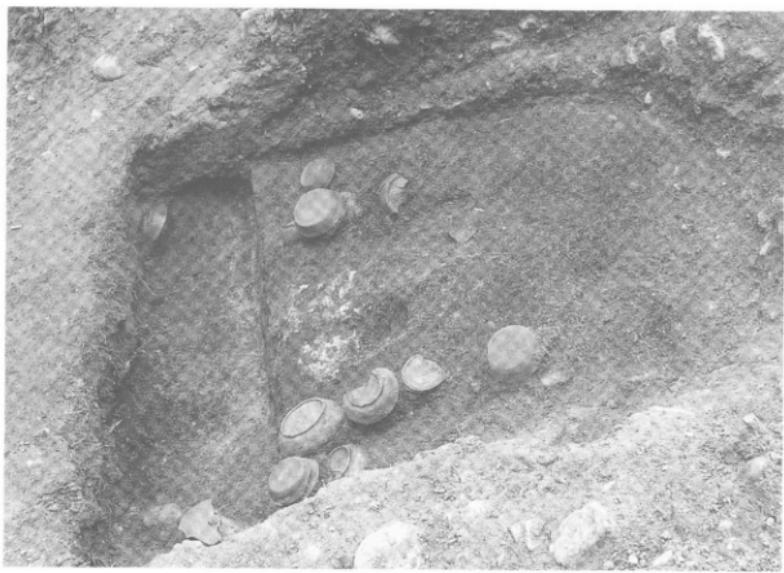


窯体 焚口部

図版4 音谷窯跡

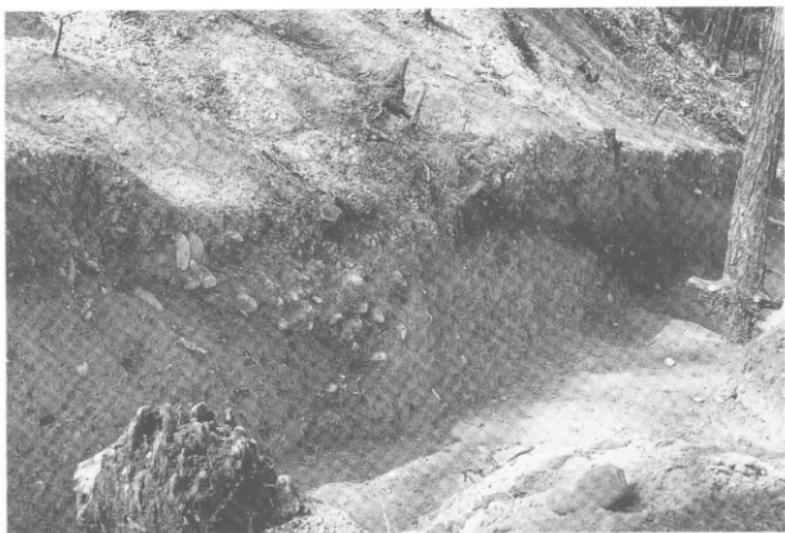


窯体 遺物出土状態



窯体 遺物出土状態

図版5 音谷窯跡



焚口部 土層堆積状況



灰原 土層堆積状況

図版6 過田上遺跡



第23トレンチ

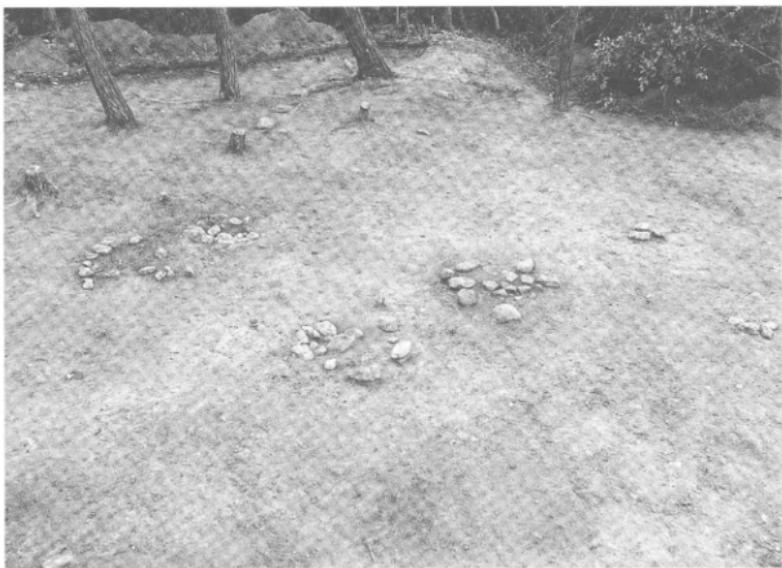


第32トレンチ

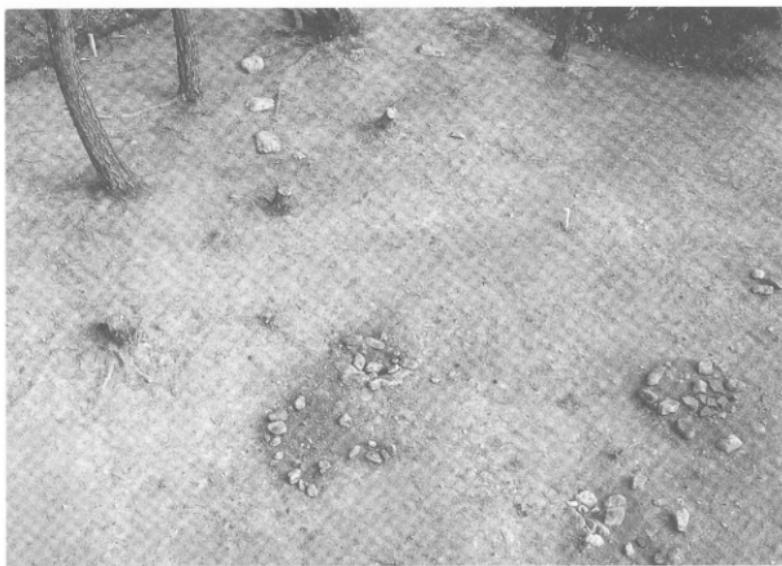


焼土坑

図版7 観音谷遺跡

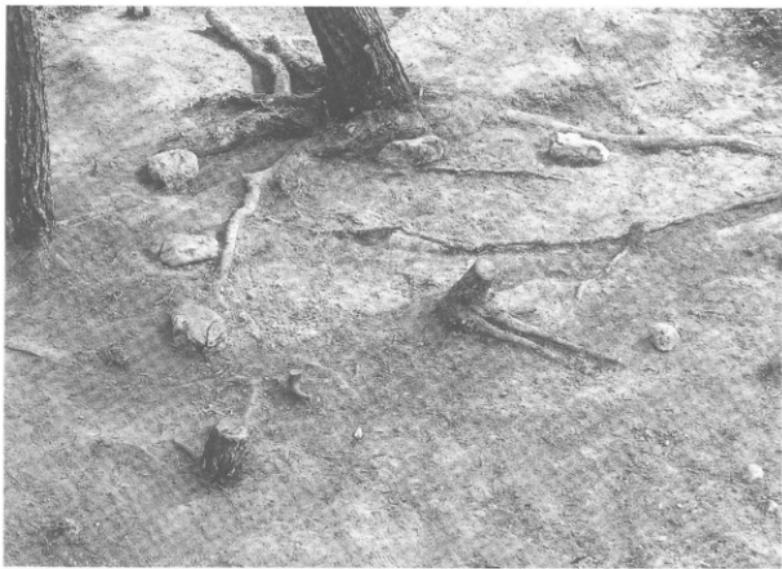


第22-2 トレンチ全景

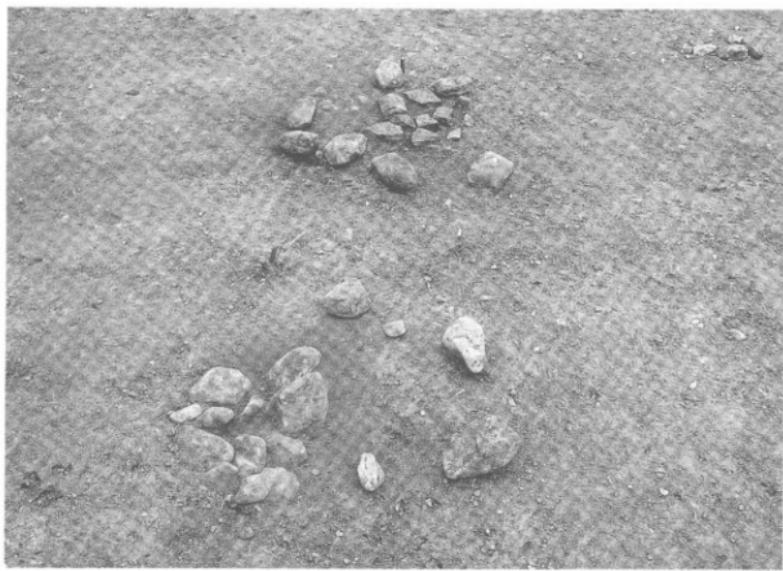


第22-2 トレンチ全景

圖版8 觀音谷遺跡



礎石建物跡全景



石組

図版9 大道端遺跡

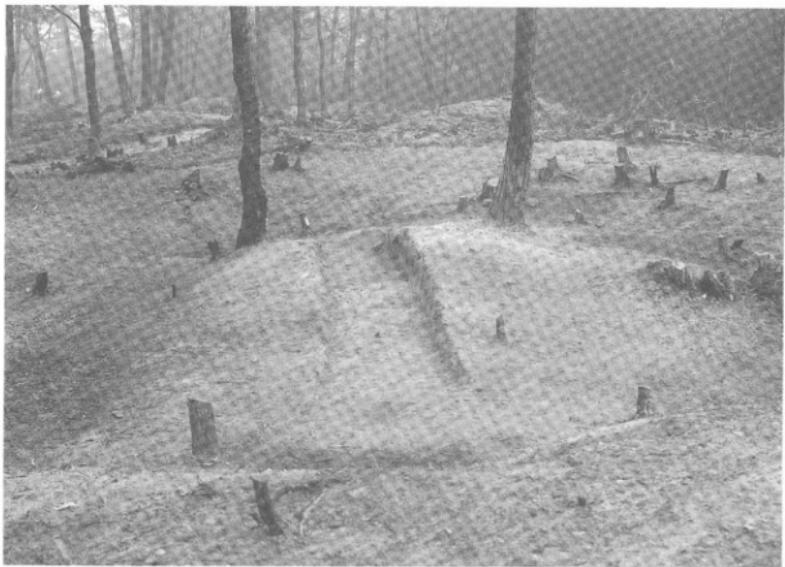


第15トレンチ

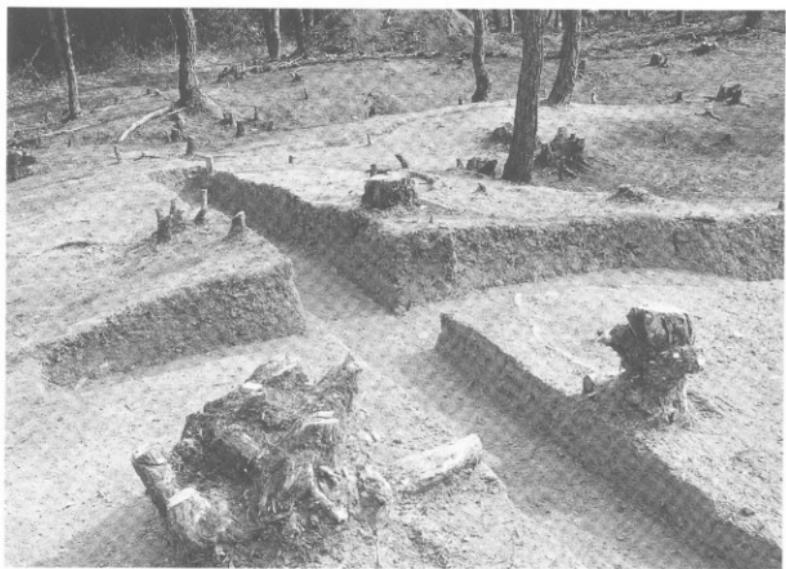


第15トレンチ

図版10 大道端遺跡



第15トレンチ 古墳状隆起



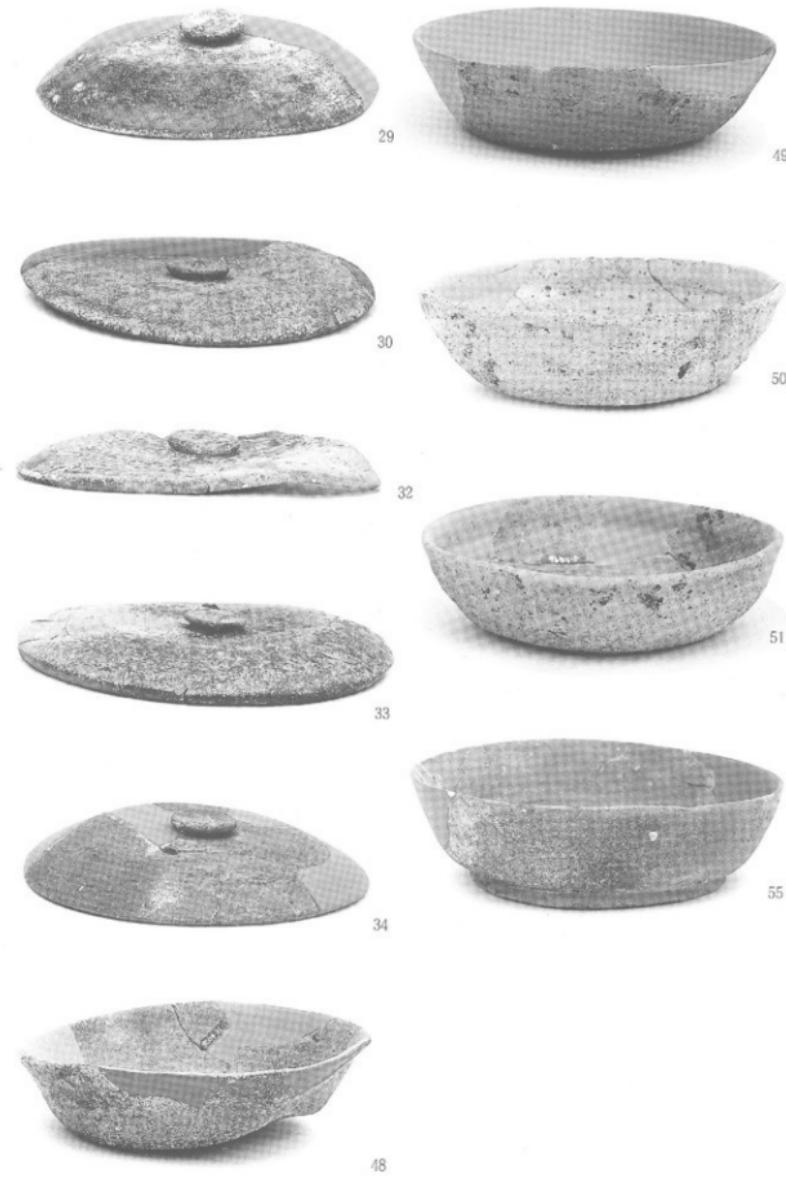
第15トレンチ

図版11 音谷窯跡



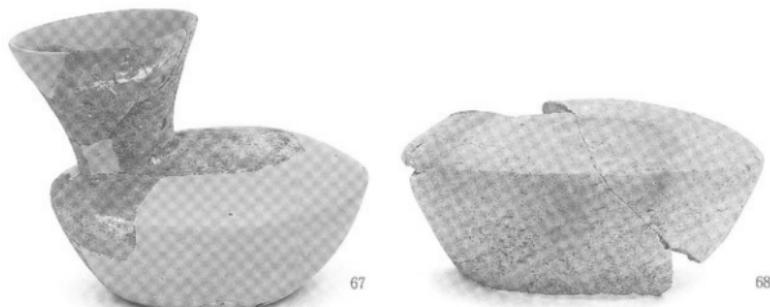
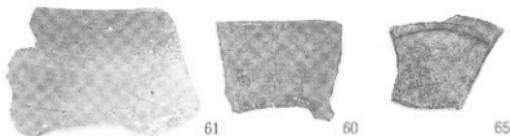
出土遺物

図版12 音谷窯跡

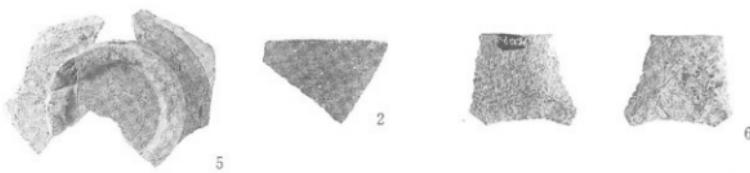


出土遺物

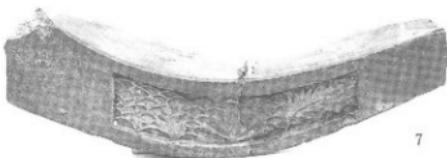
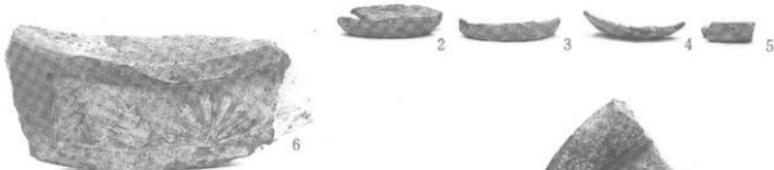
圖版13 出土遺物



音谷窯跡



迎田上遺跡



觀音谷遺跡

報告書抄録

ふりがな	おとたに かまとと						
書名	音谷窯跡						
副書名	仮称小野山田地区開発事業に伴う埋蔵文化財確認調査報告						
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告						
シリーズ番号	第169冊						
編著者名	矢口裕之・沖 憲明・今村道雄・川口洋平・目次謙一・渡辺 昇						
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化調査事務所						
所在地	〒652 神戸市兵庫区荒町2丁目1番5号 TEL 078-531-7011						
発行年月日	1997(平成9)年12月26日						

所収遺跡名	所在地			北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
音谷窯跡	兵庫県 小野市 天神町 音谷	28218	950314	34° 50' 15"	134° 59'	1996.2.29. ~ 1996.3.26	425m ²	小野山田地区再開発事業
迎田上遺跡	小野市 山田町 迎田上	28218	950339 960089	34° 50' 15"	134° 58' 45"	1996.2.19. ~ 1996.3.8. 1996.5.13. ~ 1996.6.28.	586m ²	
観音谷遺跡	小野市 山田町 観音谷	28218	950315	34° 50' 15"	134° 58' 50"	1996.1.5. ~ 1996.1.31.	920m ²	
大道端遺跡	小野市 山田町 大道端	28218	950313	34° 50' 15"	134° 59' 5"	1995.12.18. ~ 1995.12.29.	440m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
音谷窯跡	窯跡	奈良時代	窯体 前庭部	須恵器				小野市最古の須恵器の窯跡で、東大寺領大部莊との関連が予測される。1基だけ構築された非常に短期間に操業された窯跡である。
迎田上遺跡	集落跡	近世 古墳時代後期	焼土坑	石罐・須恵器 陶磁器				集落だが、大きく削平され残存せず。
観音谷遺跡	墓 祭祀	近世	石組 祀跡	陶磁器・瓦 土師器皿				近世の山田町の墓と観音堂を確認した。
大道端遺跡	生産跡 墓?	近世	スキ溝 填丘	陶磁器				畠とマウンドを持つ墓?を調査。

兵庫県文化財調査報告 第169冊

音谷窯跡

-（仮称）小野山田地区開発事業に
伴う埋蔵文化財確認調査報告 -

1997年12月24日発行

編 集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

発 行 兵 庫 県 教 育 委 員 会
〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印 刷 株式会社 精 文 舍
神戸市兵庫区下沢通6丁目2番18号
